

「あなたの趣味の部屋はどうされるのですか？まだ、オーラビジョン・システムしか置いていらっしやらないようですけど」

「あそこはフリースペースにしておきたいんだ。いずれ、原さんも来るだろうし、愛子も来る。数馬夫妻も来るだろう。いろいろな人が来るようになると思う。誰が来ても、好きなことをやれる場所にしておこうと思っているんだ」

ふたりは空腹感を覚えていた。夕食をささやかなパーティにすることにした。賢は冷蔵庫から白ワインを出しコックを開けた。梓はレトルトのピザとスパゲティを電子レンジで温めた。ふたりは白ワインで乾杯した。

「あなた、今日からよろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしく、梓に乾杯」

「あなたに、乾杯」

その晩梓は、暖房の効いた賢の寝室にネグリジェ姿で現れた。賢はそんな格好の梓を見るのは初めてだった。少し恥ずかしそうにしながら、部屋に入って来ると、ベッドの脇に腰掛けている賢に声も掛けずに、黙ってシーツの中に潜り込んだ。賢は梓に言った。

「少し、瞑想をするからね」

「はい」

梓は賢に背を向けたまま、振り向かずに応えた。

賢はこの日の省察を行った。康子の悲しみに満ちた心の動きが手に取るように分かる。賢は、癒すのに時間が掛かると思った。今日の梓はともも明るかった。両親のことも、プロジェクトのことも負の意識に繋がる部分はなりを潜めていた。それを押さえ付けているようには思えない。自分の中で上手く調和させているのが分かった。賢はアフリカの2人の女性に意識を移した。祐子からも、亜希子からも反応は無かった。賢は瞑想を解き、シーツの中に潜り込んだ。

翌日は快晴だった。寝室には朝日が差し込んでいて、昨夜からエアコンが点いていたためか、部屋の中がぼかぼかと暖かい。梓は賢の腕の中で目を覚ました。ベッドの下にネグリジェと賢のパジャマが脱ぎ捨てられている。

「もう、陽が高いのね」

「何時になるんだろう。梓、今日は滝川の実家に行くんだろう？僕も附いて行こうかな？」

「金曜日に赴任休暇を取ったから、その時に出掛けようと思っていたの。あなたが一緒に行ってくれるなら、今日行ってもいいわ」

「それじゃ、なるべく早く出掛けよう。滝川までなら、車で2時間もかからないだろう」

梓は既に実家に行く準備をしてあったので、直ぐに出掛けることができた。途中分岐があり、左折するとVEAS館の方向に向かう交差点を岩見沢方面に右折した。

「梓、今度VEASに行ってみないか？この近くにあるんだよ」

「はい、わたくしも調べました。ここのVEAS館は新しいアイテムの試行を行うところのようです。自然界の神秘を体験できるらしいです。人間の意識でどこまで入り込めるか、意識とどこまで解け合えるかを研究するための実験サイトのようなわ」

「さすがに梓だ。僕は、ついこの間、雪坂さん達と行って来たばかりだよ。鳥の体験をしてみた。火とか風とか、5大を意識したテーマを試行しているようだけど、空（くう）は無かったな。僕もこの次は是非、風の体験をしてみたいと思っているんだ、梓はどうか？」

「わたくし、新宿で植物と動物の体験はしています。楠木さんがVS館をベースにした構想を強く主張し始めた頃、VEASに通ってみました。風、面白そうですね。目に見えないものを、どんな風に表現しているのかしら、楽しみだわ」

2人は翌週の日曜日にVEAS館に行くこと決めた。梓の両親の実家は滝川の山の手にあった。家に入る前に梓が言った。

「以前は牧場を経営していたんです。両親が高齢になったので、牧場を手放して、現在は父が一人で住んでいます。母は実家から3キロほど離れた所に在る、介護老人ホームに入りました。父が1日置きに様子を見に行っています」

実家は古い2階建ての家だった。梓は、玄関に附いている呼び鈴を押さ

ずに、そのまま引き戸を引いた。由仁の家と同じように、入り口の引き戸を開けると、内側にもう一つの引き戸があった。

「お父さん、ただいま！」

「梓か？」

奥の方から嘎れた男の声がして、腰の曲がった老人が杖をついて玄関に姿を現わした。頭髪は白く顔は皺だらけで、目は白く濁っていた。

「お父さん、ただいま。今度、札幌に転勤になったのよ。これから、ちよくちよく来れるわ。お父さん、私の上司の内観さんよ……あなた、こちらは父です」

「初めまして、梓さんの同僚の内観と申します。よろしくお願ひいたします。これはつまらないものですが……」

賢は途中で買って来た菓子折を、父親に渡した。

「どうも、ご丁寧……内観さんですか、梓の父です。まあ、上がってください」

玄関を上がるとそのまま廊下になっていて、賢はすぐ右側の部屋に通された。そこは応接間形式の居間で、ソファーとテーブルが置いてある。普段は人が入らないらしく、静謐な雰囲気を感じさせる。

「お父さん、お母さんはどう？」

「相変わらずだべ。こっちの話は分かるみたいだけど、言葉が見付からないようだべよ。そんで、時々俺んことも、他ん人と間違えたりする。最初はそのたんびに、ちょっとがっかりしたりしたけど、今じゃ、あいつのことを可愛そうだと思うようになったべ。死ぬまで、この世のもんが、ちゃんと分かっているんは、有り難いことだべな。後で、お母さん所に寄ってやってくれるだべな？」

「うん、行って来るわ。お父さんはどうする？」

「俺は、今日は行く日じゃないから、止めとくべ。カレンダーに丸印を付けて、俺の行く日を教えているんだべよ。おかあさんが、こんがらがらるだろう。ホームさ入ったばかりの頃、約束の日より前に行ったら、俺と、脳神経科の先生を間違えてさ、俺んことを、「先生様、私はなんもこわくないのに、一体、どこが悪いんでしょうか？」なんて言ったんだ

べよ。あの頃は、とくにわやで（ひどくて）、風呂の入り方も忘れてしまっていて、苦勞しただべよ。今じゃ、毎日同じように生活させるから、前ほど手が掛かんなくなったようだけんどな」

梓は、賢をダイニングに連れて行って、テーブルに座るように促した。家の中は、生活のエネルギーを感じさせなかったが、きちんと片付いていた。火曜日と金曜日にホームヘルパーが来て、家の中の片付けや掃除をしてくれるとのことだった。梓は台所に入って、茶を入れながら、遅れて入って来た父に言った。

「お父さん、一人で大丈夫？」

「俺は大丈夫だべ。一人で生きることは、何も苦になんないだべよ。それよか、おまえ、こん人と結婚するんだべや？」

父親は梓に向かってそう言うと、賢の方を窺った。賢が応えた。

「はい、私たちは、これから暫くの間、一緒に生活します」

「そうかね、梓は、なまら（すごく）めんこくて（かわいくて）、優しいめんた(子)だから、可愛がってやってくださいね。私らは、こん子が居るから、生きていようという気力が湧くんだべよ。んでね、こん子は人一倍頭がいいんだべ。私らの子供みたくないんだべよ。生意気なことば言っても、虐めないでやってくださいね」

「おとうさん、内観さんは、私の何倍も優しいのよ。それに頭も私の何倍もいいの。だから、安心して」

茶を出しながら、梓が言った。父親は賢に、両親のことや、経歴などを質問した。賢は、「やはり親は娘のことが気懸かりなのだ」と思った。ふたりは実家を出て、母の入居している介護老人ホームに向かった。受付で尋ねると、母親の部屋は4階の455号室だということだった。行って見たが部屋の中に母の姿は無かった。看護師の控え室に行くと、ボランティアの人たちが来て、歌を歌っているから、「集いの部屋」に行くようにと言われた。賢は梓の後に附いて看護師に言われた「集いの部屋」に行ってみた。部屋に近づくと、合唱団の歌声が聞こえてくる。その声に混じって、老人達の音程の外れた歌声が聞こえる。賢と梓は、開け広げられている入り口からそっと、中の様子を伺った。少し高くな

っている演壇の上で白のブラウスに紺のチョッキとスカートを着た6人の女性達がコーラスをしている。きれいな声のハーモニーだった。「どこかで春が」という歌である。10人ほどがテーブルの周りの椅子に座って聴いている。老人が5人ほど車椅子に座って聴いていた。杖を横に置いて、椅子に座って眺めている人、看護師に付き添われている人も居た。みんな壇上の合唱隊の方を見て歌ったり、ぼーっと聞いたりしている。梓が賢の方を見て、小声で言った。

「あの、看護師さんが付き添っている人、あの人が母です」

白くなった髪はあまり手入れしていないようだが、身だしなみはきちんとしていて、顔も他の老人達より皺が少なく、深刺としているように賢には思えた。母親は口をもぐもぐさせているが、歌を歌っているようではなかった。「どこかで春が」の歌に続いて、2曲が歌われた。次の歌になったとき、母親の顔が嬉々としてきて、楽しそうに歌い始めた。それは、「さくら」だった。梓が小さな声で言った。

「母は、桜の花が大好きなんです。北海道は桜前線が一番最後に昇って来るでしょう。テレビで、全国の桜の開花のニュースを見ると、目を輝かせていたわ。北海道の桜も奇麗なの。札幌、母に連れられて、よく見に行ったわ。母は、何時も「さくら」を唄ってくれたのよ。母の最高の喜びはみんな桜に関係していたの。忘れてないのね」

梓の瞳が潤んでいた。やがて合唱隊の美しい歌が終わると、老人達は一斉に拍手をした。母もみんなに合わせて両手を打ち合わせ、頭を下げた。まるで、神前に祈りを捧げてでもいるかのようだった。老人達が一人、また一人と去ってゆくと、老人数人と母と看護師が後に残った。老人達はそこで、また歌を歌い出した。看護師が母を促すようにして立ち上がらせた。母はテーブルに手を突いて立ち上がろうとして、入り口の方を見た。

「あ・ず・さ・さ・あ・ず・さ！」

母のとぎれとぎれだが、しっかりとした声が、周りの老人達の視線を引き付けた。梓は看護師に向かって頭を下げた。看護師も頭を下げて、母の腕を抱きかかえるようにして、入り口の所に母を連れて来た。

「お世話になります」

「おかあさん、しっかりなさっていますよ」

看護師がそう言うと、梓は母に向かって言った。

「おかあさん、元気そうで、よかった」

「あずさ、どこ行ってたべさ？」

「おかあさん、わたし、今度、近くに住むから、時々来るからね」

「そうかい。もう遠く、行かないでくれよ。おまえだけが頼りだべさ・・・あつ、先生さま、ありがとうございますでした。検査の日なんだべな」  
母は賢の方を向いて、そう言った。賢はにっこり笑って、頭を下げた。

「おかあさん、このひとは、内観賢さんよ。私の大切な人よ」

梓は賢の背に手を廻して、母に紹介した。

「内観賢と申します。梓さんと一緒に働いています」

「先生様、よろしくお願ひします」

「おかあさん、先生じゃないのよ。私の旦那様よ」

「ああ、そうかい。旦那様、梓の旦那様、梓をよろしくお願ひします・・・  
先生様、検査はどこでやるべな？」

まだ、賢のことを病院の医師と混同している。賢と梓は、看護師に附いて母の居室に行き、そこで暫くの間、母と、時々つじつまが合わなくなる話をしていたが、賢は、会話の内容から、母が梓に全面的な信頼を置いていて、梓が東京に住むようになってから、急に老いが進んだのだということを知った。老人ホームには食堂があり、外来者も食事をするのができたので、ふたりは母と昼食を共にした。梓は途中の土産物店で買って来たイカめしを食卓に添えた。梓は母の食事の世話をし、母が、食べるのを中断すると、衰えた母の手を取って擦ってやっていた。そうすると、また食事に意識が向くようだった。

「イカめし、美味しい・・・あずさ、赤ちゃんはどこにいるべ？」

梓は、賢の方をちらっと見て、顔を赤らめた。それから、賢の方を見ないようにして言った。

「おかあさん、赤ちゃんはまだできてないわ」

「あずさ、早く、おまえの、赤ちゃんを、見たいよ」

母の意識はこと、梓に関する限り、認知症の症状をそれほど感じさせなかった。食事が済むと、ふたりは引き時を探していた。前回、アメリカに出張する前に訪れたとき、母は梓の「帰る」と言った言葉に泣き出してしまい、梓も辛い思いをした。この日は母を悲しませないようにしたかった。

「お母さん、私、仕事があるから、帰るわね。今度は札幌に居るから、直ぐに会えるわよ。また来るから、元気でいてね」

「あずさ、分かったよ。今度は赤ちゃんを連れてくるんだべ？」

「おかあさん、赤ちゃんはまだよ。だけど、おみやげを買ってきてあげる。お母さんの好きな牛乳せんべい買って来てあげるからね」

何とか母を説得できたと思った。梓が立ち上がり、賢も椅子から立つと、母の目から大きな涙が流れ落ちた。

「おかあさん、また、直ぐに来るから。お父さんも明日来るからね」  
母は黙って頷いた。

ふたりが家に戻ったのは、既に陽が落ちて、辺りが薄暗くなり始めた頃だった。

「お母さんの痴呆症はそれほど進んでないのかな？」

「私が居るときは、かなりしっかりしているようなんだけど、私が帰った後は、腑抜けの様になってしまうらしいの。私も近くに居てあげたいんだけど・・・」

「愛だな。愛があると、人はどんな状況でも生きられる。今日、お父さんが言っていたら。梓が居るから生きてゆけるって。君の愛情が、ご両親を支えているんだよ」

「あなた、私はあなたに出合ってから、変わったの。それまでは、両親のことは、滅多に顧みなかったわ。実家に帰っても、そこは自分の寛ぐところという程度の意識しかなかった。両親が年老いてゆくことは分かっているけど、自分から見た両親だったの。自分が居て、初めて両親が見えたわ。今は違うわ。両親と会うと、逆に、両親の目から見た自分が見えるような気がするの。私のことを見ている母は、私そのものなのね」

「梓、そこまで来ていたら、もう少しだね。梓とお父さんやお母さんの

間に、何の区別も無くなったら、自分の核心に戻ってゆけるんだ。逆説的だけどね。自分が無くなれば、本当の自分が現れてくる」

「だけど、どうして、あなたと一緒に生きるようになると、こんな風に変われるのかしら？きっと、あなたは特別の存在なんだわ」

「そんなことはないよ。誰でもみんな同じだよ。ただ、気付いているか、いないかの違いだけだよ」

翌日、梓は賢の車に同乗して、北海道支社に出社した。10階の総務部に直接出向いた。支社長直下の企画次長としての赴任初日だった。梓が受付に姿を見せると、支社長の秘書が迎えに出てくれた。梓は案内されて支社長室に通された。既に支社長は出社していて、自分の席に着いていたが、梓の姿を見ると立ち上がって、手前にある応接用のソファーに座るように右手を上げて示した。

「おはようございます。本社から転勤してきました田辺梓です。本日からお世話になります」

「おはようございます。田辺次長、お待ちしております。社長から、田辺次長ご自身が、こちらへの転勤を申請されたと伺っています。既に内観部長も赴任されていますが、これからMIプロジェクトも本格的に動き始めるということですね」

「はい、北海道支社がV S館の建設の先鞭を付けることになりますので、本社も本腰を入れて取り組み始めています」

「そうですね。我々はこういう業務に慣れていませんから、いろいろご指導いただかなくてはならないと思います。よろしく願いいたします。ところで、お住まいは決まりましたか？」

「はい、由仁の方に済むことになりました。北海道支社には、以前出張で来ただけですから、業務の推進については、是非、支社長のご指導をいただきたく思います。よろしく願いいたします」

支社長は、住居についてそれ以上の質問をしなかった。梓はほっとした。支社長への挨拶を済ますと、秘書に案内されて総務部長席に挨拶に行った。総務部長の神佐川は腰を低くして挨拶をした。

「社長から、田辺次長にはいずれ運用プロジェクトと共同出資で作る新



会社を牽引していただく予定だと伺っています。わたくしは、もう定年間近ですが、これからお世話になることもあるかと思えます。その節はよろしく願いいたします」

神佐川は支社内の部長席への挨拶回りに同行してくれた。梓の席は窓際の、上席部長席で、横に打ち合わせ用の小デスクもあり、席の背後に個人用のロッカーも用意されていた。北海道支社には企画部門は無かった。新設部門として新たに作られることになっていて、当面は直属の部下が一人もない自由な存在だった。いずれ、組織的には梓の管下に、総務部長、経理部長、企画部長が属する形になることになっていて、企画部長を兼務する予定だった。近い内に、企画部には5、6人を配転させる計画になっていた。その日の昼食は支社長が梓を連れて、レストラン街の小料理屋に行った。梓はそのレストラン街も見覚えがあった。子供の頃、両親に連れられて来た記憶があった。それは桜見物の時だったかも知れないと梓は思った。小料理屋にもランチメニューが用意されていた。価格は高めだが、支社長はランチを2人前頼んだ。

「田辺次長、ご結婚はされていらっしゃるんですか？」

「いいえ、まだ独身です」

「そうですか、どなたかいらっしゃるのですか？」

「ええ、います」

支社長は、それ以上は立ち入らなかった。

「私は、ちょっと分からないんですが、支店の方に内観部長が転籍されたでしょう。あの方は、確かMIプロジェクトの責任者だった方ですよ。どうして、支社の総務部に転籍されたんですかね？」

「私にも分かりません。内観部長は優秀な方ですし、業務推進も順調にこなされていて、何の問題もなく、私たちが部下として尊敬していた方です。全く理由が分かりません。私は、内観部長と協力して、このVS館の立ち上げを達成して、支社としても利益を出せるようにしようと考えています」

「それは、有り難いお言葉です。内観部長もそのようにおっしゃっていました。頼もしい限りです。是非、よろしく願いいたします」

梓は支社長に他意がなさそうなので、胸を撫で下ろした。その日の午後  
は荷物の整理とPCのセットアップを行った。業務終了前にネットワー  
クの接続が完了した。賢から帰りの時間についてメールが入っていた。

賢は、朝、エレベータを降りたところで、康子に出合った。康子は賢に  
遇うと、目を伏せて

「おはようございます」

と言った。賢も「おはよう」と応えた。賢が席に着いても、康子はなかな  
かな現れなかった。始業時間ぎりぎりになって、やっと席に着いた。賢  
はこの日からV S館の運用コストの試算を始めることにした。初めに先  
ず、あらゆる支出用件を洗い出してみた。様々な運用形態を想定しての、  
支出項目の洗い出しは1日や2日でできるものではなかったが、V E A  
S館を参考にして、一件一件取り上げ、それに説明書きを付記していっ  
た。昼食は遅番に変わっていて、12時15分からだった。康子に声を  
掛けると、只頷いただけだった。賢が外に出て行くと、康子は1、2歩  
後を附いて来た。賢は最初の日康子が連れて行ってくれた、船宿に入  
った。既に大勢の客で一杯だったが、幸いカウンター席が2席空いてい  
た。

「らっしゃい、姫、今日は何にしましょう」

康子は頭を下げただけで、何も応えなかった。賢が、

「定食2つお願いします」

というと、店主は

「へい、カウンター、定2丁」

と言った。威勢がよい。

「部長、これ持っててください」

小さな声で、そう言うと、康子は小さな紙袋に入ったものを賢に差し出  
した。賢が受け取って袋を開けてみると、中に青い布地に金色の刺繍を  
施した5、6センチのお守りが入っていた。

「お守りだね。これを僕に？」

「・・・はい、私の心です。私と思って持っていてくださいませんか？」

康子は、下を向いて、聞こえるか聞こえない声でぼそぼそと言った。

「ありがとう。君の心なんだね。いつも身に付けているよ」

康子は下唇を噛んで、頷いた。定食はいくら井だった。康子は半分ほどしか食べなかった。店を出て、支社のビルに戻る途中で賢が言った。

「康子、僕たちは友達だよ。分かっているね」

「私、苦しいんです。自分ではどうすることもできないんです。私、死んでしまうかも知れません」

「死んでしまうなんて考えてはいけない。君も知っているように、僕は田辺部長と同棲し始めた。僕たちがこの社会に居る限り、君とは、友達として、会社の仲間としての付き合いしかできないんだ。それがこの社会のルールだから。だけど、僕は君を愛している。これは社会とは関係ない。君という存在がものすごく好きだ。分かってくれるかな？」

「私には分かりません。一度に複数の女性を愛するなんて、できるわけありませんから。部長は私のことを、遊び相手だと思っているんじゃないですか？」

「いや、そんなつもりは毛頭ないよ。君のことは本当に好きだよ」  
支社のビルが近くなると、ふたりは黙ってしまった。

梓は約束の時間ぴったりに地下の駐車場に現れた。賢はそれより2、3分早目に自分の車に乗って待っていた。梓を助手席に乗せて駐車場を出ると、出口に康子の姿があった。康子は賢の車を待っていた。賢は康子の横に車を寄せて窓を開けて言った。

「雪坂さん、駅まで送るよ」

康子は頷いて、車の後部座席に乗った。札幌駅の駅前に車を着けても、康子は降りなかった。

「雪坂さん、降りないの？アパートまで送ろうか？」

康子は首を横に振った。

「由仁まで一緒に行くつもりなの？」

康子は頷いた。賢は仕方なく、ブレーキを離した。それまで黙っていた梓が言った。

「あなた、内観部長のことを好きになったの？」

「はい」

康子は小さな声で応えた。

「内観部長は、全ての人を愛しているのよ。あなたも、私もその中の一人なの。それを分らないと、内観部長を愛したとき、苦しむことになるわよ。この方は、この社会の中だけで生きているんじゃないの。もっと高い次元で生きているのよ」

「わたしには、分かりません」

「雪坂さんは江別だったな。送ってゆくよ」

「いやです」

賢は困ってしまった。しかし、諦めて自分の家に向かうことにした。それから3人とも無口になった。梓も心に一抹の寂しさを感じていた。康子は由仁駅でも降りなかった。とうとう家にまで来てしまった。賢は康子に家に入るように言い、ソファーに座らせた。梓が3人分の食事を用意した。ブロッコリを茹で、レトルトのハンバーグをフライパンで熱し、漬け物を切った。ご飯は、朝掛けたタイマーで炊けていた。梓と康子が並び、賢が2人に向かい合って座って、夕食になった。

「雪坂さん、食事が済んだら、君のアパートに送ってゆくよ」

康子は頷いた。食事中、3人は黙っていた。食事が済むと、康子が言った。

「私に後片付けをさせてください。私も、内観部長の生活の中に居たいのです。許してください」

梓は、片付けを康子に譲って、ソファーで寛いだ。やがて康子が満足げな顔をして戻って来ると、賢は、梓に戸締まりをしっかりと念を押して、康子を連れて外に出た。既に7時近い。この日は曇っていたためか、辺りは真っ暗で、外からは居間の明かりがぼつんと点いているの見えるだけだった。賢はポルターガイストと幽霊の話をしたので、梓が恐怖心を抱かないか心配になった。康子を助手席に乗せて、先ほど来た道を札幌に向けて戻った。もう道は暗い。所々混雑している道路もあった。

「康子、この前言ったように、意識を僕に向けていれば、僕と一緒に居るのと変わらないんだよ」

「許してください。私には、そんな器用なことできません。一緒に居ないと、頭が可笑しくなってしまうそうなんです」

いくら話しても、康子は受け入れなかった。やがて江別市に入った。康子の案内で、漸くアパートに着いた。アパートとは謂っても、外観は鉄筋4階建てのマンションの様な造りだった。康子の指示する駐車場に車を停めても、康子は降りない。

「康子、どうしたんだ。君の家に着いたじゃないか」

康子は頭を下げて、首を横に振っている。

「分かった。少し、君の家に寄ってゆくよ」

康子はやっと車から降りた。外は冷え冷えとしていた。賢は康子の後に附いてエレベータに乗った。康子の部屋は4階の412号室だった。部屋に入ると、女性の部屋特有の香水の匂いがした。康子は明かりを点け、エアコンのスイッチを入れた。ピンク色のイメージが、ぱっと賢の目に飛び込んできた。ワンルームのアパートだった。壁は白でカーテンとベッドカバーが濃いピンク色だった。床も灰色のカーペットの上に薄いピンク色の絨毯が敷いてあり、上板の赤い座卓がある。賢は座卓の前に座った。康子が言った。

「賢さん、コーヒーがいいですか？それとも、お茶がいいですか？」

「コーヒーがいいな」

康子は、入り口の左脇にある狭いシンクの流し台の上に付いている棚から、インスタントコーヒーを取って、コーヒーカップにパウダーを入れ、保温ポットからお湯を注ぐと、スティックのシュガーと匙を添えて持って来た。

「康子、ピンク色が好きなんだな」

「はい」

返事をしながら、康子はコーヒーカップの載った受け皿を賢の前と、その直ぐ横に置いて、賢に寄り添うように座った。

「賢さん、わたしのこと、うっとうしいと思っているでしょ？」

「いや、そんなこと、これっぽっちも思ったことないよ。君のことを愛しているって言っただろう」

「本当にわたしのことを愛しているなら、わたしだけを愛して欲しいの。わたしのことは、いつでも抱いていいわ。今だっていいのよ。構わないのよ」

「康子、僕を困らせるなよ」

「ほら、やっぱり。本当は、私のことを鬱陶しいと思っている」

暖房が効いてきて、漸く身体が温かくなった。

「わたし、シャワーを浴びます。少し待っていてください」

そう言うと康子は上着を脱ぎかけた。賢は立ち上がった。

「もう、帰るよ。今日は帰るよ。康子、もっと落ち着いて、自分の心の動きをじっと見つめてご覧」

服を脱ぎかけた手を止めると、康子は言った。

「やっぱり、田辺部長の所に帰るんですね。私のことは遊びなんだ。男なんて、みんな同じだ」

「そんなことはないよ。君を愛しているよ」

賢は康子を抱き寄せて、口づけをした。康子は賢の背中に手を回して、しっかりと抱きついた。賢は暫く康子を抱きしめていたが、そっと引き離して言った。

「康子、もっと時間を掛けて、お互いのことを見つめてゆこう。兎に角、今日は帰るよ」

「いや！わたし、ひとりぼっちなんだもの。わたし、死んだっていいんだ。だって、誰も居ないんだもの。賢さんしか居ないんだもの。わたしなんて死んだ方がいいんだ」

賢は、もう一度康子を抱きしめた。

「人はみんな繋がっているんだ。君はひとりぼっちなんかじゃないよ。みんな仲間なんだ。友達なんだよ。兄弟なんだ。亡くなったご両親に代わるお父さんやお母さんだって一杯いるんだよ。君の気持ち次第なんだ。僕たちは、永遠の友達だよ。だから、心配しなくていいよ。今日は帰るけど、何時かきっと一緒に過ごせるときも来るよ」

康子は、漸く収まった。賢の胸から離れると、賢の目をじっと見つめた。康子の目に涙が溢れてきた。

「わたし、待ってる。あなたと一緒に過ごせる日を待ってる」

「うん、何時か、きっとそうなるよ」

賢は康子のアパートを出た。康子が駐車場まで送って来た。賢は康子の手を握ってから、車に乗った。康子は何時までも賢の車を見送っていた。賢は本当に、康子の魂が自分の魂に絡み付いていると感じていた。それが自分にどんな影響を与えるかなどと云うことは考えなかった。

家に戻ると9時を回っていた。呼び鈴を押すと、直ぐに梓が扉を開けてくれた。

「お帰りなさい。大変でしたね」

「梓、一人で、大丈夫だった？お風呂に入った？」

「いいえ、何となく気味が悪くて……」

「やっぱり、怖かったのか？」

「わたくし、一人で寂しいのでテレビを観ようと思って、壁に付いているアンテナ線の端子に同軸ケーブルを接続してみたのですが、映像が映らないんです。あの同軸ケーブル、切れているのかしら？」

梓は、土曜日に開梱して、そのまま乗せ台の上に置いたままになっていたテレビを、接続しようとしたのだった。確認してみると、地デジのアンテナ端子にきちんとアンテナ線を接続してある。賢はテレビをONし、メニューの初期設定画面を出して、受信電波強度を調べてみた。信号レベルが極端に低い。どうやら、地域の設定が合っていないのが原因のようだった。北海道札幌地域に設定をし直すと、直ぐに映るようになった。

「梓、元研究所長でも、テレビの設定には疎いの？」

「あっ、そうでした。引っ越しをした後は地域設定が必要でしたね。うっかり東京の設定のままで観ようとしていました」

賢は梓が、やはり恐怖心を抱いていて、テレビで気を紛らわせようとしていたのだと思った。「暫くは夜、一人きりにしたら可愛そうだ」と思った。丁度ニュース番組を放映していた。インドでまた、日本人ペアの観光客が事故に巻き込まれたというニュースだった。コルカタでの事故

のようだった。キャストは連続して起きたペアの日本人観光客の事故を疑問視していた。

「まだ尾を引いているんだな。あの爆破が正しかったのかどうか、まだ結果が出ないな。自分の直感に従って決断したんだから、間違っていると云うことはないと思うけど」

「ええ、わたくしも、あれは少し強引だったと思いますが、その結果、売春組織が焦燥感を募らせたのは確かだし、今まで知らんぷりをしていたあの国の政府が、そこに目を向けるようになったことも事実ですから、あなたのあのときの決断は正しかったと思います」

「動機は祐子を助けることだった。だから、是も非も無いと思うんだ。只、手段については、反省しなくてはならないな」

賢が家に帰って来たことで、梓の恐怖に似た不安は一掃された。賢に促されて、梓は浴室に向かった。賢は康子に意識を移してみた。康子の寂しげなイメージが眉間にある目を通して見えてきた。康子は座卓の上にあるコーヒーカップを虚ろな目つきで眺めている。賢の心に悲しみの感情が沸き上がってきた。意識で康子に話し掛けてみた。

「康子、俺だ、賢だ。分かるか!?!」

康子は頭の中に賢の声が聞こえたような気がした。ふと我に返ったように顔を上げると、辺りを見廻した。誰も居ない。

「賢さん、今どこに居るのですか？」

賢は意識を康子の部屋に移し、自分をそこに実体化させた。

「ここに居るよ」

その声で康子は振り返った。賢の姿がそこにある。康子は驚いた。

「ど、どうしたのですか？さっき、車で帰ったじゃないですか」

「君が寂しそうだから、慰めに来た。5分したら、家に帰るよ」

康子は立ち上がると、賢の胸に身を寄せた。賢は康子を抱き締めた。

「もう、寂しくないだろう。何時だって、こうして君の近くに居るよ。だから、元気を出すんだよ」

康子の身体は暖かさを失っていた。賢は自分の身体に頭頂の百会から気を注入し、腕の中の康子を暖めた。2人は黙って5分間ほど抱き合っ



いた。康子は目を瞑っていた。

「賢さん、もう大丈夫です。わたし、もっとしっかりします」

それを聞いて賢は安心した。家に戻ると、テレビが点いたままになっていた。テレビを切って少しすると、電話が鳴った。原からだった。

「賢さん、そちらはいかがですか？」

「原さん、こちらはもう、生活基盤は安定したよ。愛子は元気ですか？それとオーラビジョンの方は順調ですか？」

「愛子さんは、元気です。ちょっと寂しそうですけど、僕が見る限り、問題は無さそうです。会社も順調ですよ。あれから変な攻撃は収まりました。それで、次の製品のことなんですけど、今、ちょっと実験できますか？」

「えっ？ここで実験できるのですか？時間は大丈夫だけど」

「ええ、物質転送の実験です。そちらに送ったオーラビジョン・システムの箱の中に、携帯電話ほどの大きさの携帯型の位置情報送信機と巻き尺とコンパスがあったでしょう？あれを使って実験したいんですけど、そちらにありますか？」

開梱したときは、それらが、どうして入っているのか分からなかったが、とりあえず箱から取り出して、オーラビジョン・システムの上にそのまま置いてある。

「うん、別の部屋に置いてあるよ。一体何だろうと思ったけど、その内に連絡があるだろうと思って」

「それを電話口まで持ってきてくれませんか？ちょっと試してみたいんです」

賢は趣味の部屋に取りに行った。廊下に出ると、梓がネグリジェ姿で洗面所から出て来るところだった。梓は賢の姿を見ると、咄嗟に持っている着替えで前を隠した。

「風呂出たのか？」

「はい、お先にいただきました」

「今、原さんから電話があって、なにか実験をやるらしいから、ちょっとリビングの方に来てみないか？」

「はい、直ぐに行きます」

賢は端末などを手にすると、急いでリビングに戻った。梓がネグリジェの上に白いガウンを羽織って入って来た。

「原さん、持って来ましたよ」

「賢さん、その端末のスイッチを入れてみてください。それからそれを周りに何も無い、部屋の中央辺りに置いて、少し、そうですね2、3メートルほど離れて見ていてくれませんか？」

賢は言われたとおりにした。暫くすると、その端末の右側の空間がぼやけたような感じになり、そこに20センチ程のぬいぐるみの猫が出現した。梓はびっくりしている。

「原さん、猫のぬいぐるみが現れましたよ」

「賢さん、上手くいったようですが、ちょっと触らないでそのままにしておいてください。巻き尺とコンパスで、端末からの距離と方向を計って教えて欲しいんですけど」

賢は測定して、その数値を原に伝えた。方向はおおよそだったが、原にはそれで十分なようだった。

「賢さん、上手くいきました。物質転送装置は、もう製品化しても問題ないレベルになりましたよ。品物を送る場所の位置さえ確定できれば、大丈夫です」

賢は原の能力に脱帽だった。これで世界が変わると思った。

「原さん、凄いですね。転送先にはこの位置情報送信機を置けばいいんですか？」

「いいえ、それも要らないんです。ただ、正しい位置さえ確定できればいいんです。だから、転送場所を決めるときに、その装置からの情報が必要なだけです。賢さんも知ってるでしょう。時空間は写像を転写する意識で展開しているだけですから、ある特定の空間の情報を別の空間情報と入れ替えるだけで、その特定の空間領域を入れ替えられるんです。前回東京のアパートでやった実験と、基本的にそれほど変わってないんです。只、送り先に装置が要らないから、これは実用になると思うんです」



梓はベッドの中で身体を動かしたが、返事はしなかった。

翌日も賢は梓と康子を車に乗せて帰宅の途に着いた。途中でファミレスに寄ることにした。食事をしているときは康子は楽しそうだったが、賢が家まで送ると言うのと、また落ち込んでしまった。賢は康子のアパートに着くと、一旦部屋まで康子を送り、玄関口で暫く抱き締めてから、車に戻ることにした。昨日と同じように、賢の腕の中で康子は元気を取り戻した。車に戻ると、梓は無口になっていた。

「梓、怒っているのか？」

梓は首を横に振った。しかし賢が話し掛けても、言葉を返さなかった。只、首を振ったり、頷いたりするだけだった。2人の会話は途切れてしまった。しかし、梓は家に着いて中に入ると、元気を取り戻した。賢に先に風呂に入るように勧めて、自分は趣味の部屋に入り、棚から1冊の本を取り出して読み始めた。賢が風呂から出て来ても、まだ本を読んでいた。

「梓、お先に」

賢は梓に声を掛けてから、寝室に向かった。先ず一日の省察を行い、続いて瞑想をした。瞑想を終えてから祐子と亜希子に意識を繋げてみた。亜希子から応答があった。

「あなた、わたくしは毎日ジェノサイド・メモリアルに通っていますが、あそこに屍を置かれている、亡くなられた方々の魂の内、普通の意識だった人たちの魂は、ほとんど、元いらした場所に戻っていただくことができました。あなたに教えていただいたとおり、わたくしの体調の良い、そして、天候も良いときにだけ出掛けるようにしています。でも、荒んだり歪んだりしていた魂は、まだ、わたくしの力ではどうすることもできません。一度、あなたにも来ていただきたいと思っています。一緒にお導きしてあげたいと思います。わたくしは、あしたからまたエチオピアに参ります。あそこの貧しい人たちや病気で苦しんでいる人たちを見舞って参ります。1週間ほど滞在する予定です」

「亜希子、気を付けるのだよ。エチオピアはアビシニア高原の風土病の地として恐れられていて、感染性腸炎やコレラ、腸チフスなんかの怖い

病気の発生がある地域があるから、予防接種は勿論、衛生的な面でも万全を期して行くんだよ。何かあったら、僕に連絡を取るんだ」

「はい、心得ていますわ。ありがとうございます。あなたからその優しいお言葉をいただいただけで、元気100倍になりますわ」

亜希子は明るかった。賢は安心した。祐子と連絡はとれないものの、亜希子の様子から、元気でいるらしいということが伺えた。祐子が人々のために身を粉にして働いていることは分かっている。賢が意識を寝室に戻すと、頭の中に自分を呼んでいる声が響いてきた。

「賢、ワシだ。分かるか？ムクウだ」

賢は、海の老人を思い浮かべた。久しく遇っていない。一体何だろうと思った。

「ムクウさん、私の意識に話し掛けられていますね」

「そうだ。賢、お前に話さなければならないことがある。梓と康子を連れて、苫小牧の海岸に来て欲しい。いつでもお前の都合の良いときでいい。事前に連絡をくれる必要もない。お前が来てくれたとき、私もそこに居る」

「分かりました。近いうちに、必ず伺います」

ムクウからの連絡はそれだけだった。

支店で日々の勤務は、賢にとって、すこぶる居心地の悪いものになっていった。賢が毎日自分の車に梓と康子を乗せて退社するということが噂になって広がり、安芸津は露骨にそれをなじったりした。噂は特に女性達の間広がった。札幌市店内だけでなく、北海道支社の中でも公然と話されるようになった。安芸津の罵声はその噂があたかも真実であるかのように響いた。

「おい、内観！おまえなあ、ちゃんと仕事をしてるのか!?毎日女と遊び歩いているそうじゃないか、そんなこんじゃいい仕事できねえだろうが。少しは真面目にやれよな！」

それが只の罵声に過ぎないことを分かっていたので、賢は大抵の場合、黙っていた。賢と梓はフロアの関係から、昼食の時間が30分ずれていた。そのため、賢は梓と昼食を共にすることはできなかった。木曜日の

昼、賢と康子は2人でレストラン街に向かって歩いていった。背後から、安芸津の罵声が聞こえた。

「おまえ、女と一緒に住んでるそうじゃないか!?それで、内の雪坂姫に手を出したりしたら、どういうことになるか分かっているな!?毎日、姫と一緒に帰っているらしいじゃないか！」

康子が振り向いて言った。

「安芸津部長、どうして、そんなに個人的なことに立ち入るのですか!?内観部長は何もしていません！私は、只、車に乗せて行っていただいているだけです！」

安芸津は言った。

「雪坂、俺は、おまえのことが心配なだけだ。おまえは一人暮らしだからな、変な虫が付かないように、心配しているんだよ。大事な部下だからな」

賢が言った。

「安芸津さん、僕たちは友達です。一緒に退社したらまずいのでしょうか？」

安芸津は賢の言葉を無視して、取り巻きの二人に話し掛けながら、差し掛かった交差点を右折してしまった。

「全く、安芸津部長は、どうしてあんな酷い言い方をするんでしょう。あの人に掛かっちゃ、プライバシーも何もあったものじゃありません」

「康子、まあ、社会には、ああいう人も居るんだよ。いちいち気にすることはないよ」

直接嫌みを言うのは安芸津くらいのものだったが、賢は支社・支店内では偏見に満ちた視線に晒され続けていた。木曜日の退社後、3人で賢の家に向かう途中、梓が言った。

「正式には来週発令があると思いますが、来週早々、本社から2人転勤して来ます。土地買収交渉や、周辺住民への説明など、V S 館建設に向けた具体的な作業を担当することになります。それで、来月からですが、賢さんと雪坂さんは席を支社の企画部に移していただくことになります。私と一緒に職場になります」

「そうか、それは便利になるね。退社するときも、連絡を取り合わなくてもいいしね」

「私は、賢さんの上司の立場になってしまいます。私、どうしたらいいか悩んでいます」

「馬鹿だな、会社のことじゃないか。どうってことないよ」

康子が言った。

「私も異動になるのですか？」

「ええ、そうよ。あなたは元々支社の仕事も担当していたでしょう。英語の知識もあるし、これからはその力を発揮していただくことになるわ」  
康子は、複雑な気持ちだった。これからは安芸津の執拗な中傷からは逃れられるようになるが、昼食の時間を賢とふたりだけで過ごすことができなくなる。思い通りにならないもどかしさを感じていた。金曜日、梓は赴任休暇を取り、母親を見舞うために滝川に出掛けた。この日、康子は賢の家泊まるための支度をして来ていた。翌日そのまま賢の車で苦小牧に行くためだった。梓も夕方には帰宅していて、3人で夕食を共にした。康子はベッドのある方の客間、梓は初めて家主の妻の寝室で休んだ。意外に不安や恐怖は感じなかった。

その翌日の土曜日、賢は梓と康子を乗せて車で出掛けた。ふたりには知り合いと会うとだけ言った。梓は誰に会うのかと訊いた。

「海の老人って云われている人だよ。ムクウという名前だ。ずっと遇ってないんだけど、会いたいという連絡を貰ったんだ」

「わたくしたちが一緒に、邪魔じゃないですか？」

梓が言った。

「海の老人は君たちにも会いたいわって言っていたよ」

苦小牧市内に入って、賢が「これから海岸に向かう」と言うと、ふたりは怪訝な顔をした。

「海の老人は普通、海に現れるんだ。今時の海は寒いんだけどね」  
汐見町から高砂町に向かって海岸線を走った。市民の憩いの場となっている海岸は、侵食で失われかけた砂丘を復活させた空間だった。あの東北大震災の時も2メートルを超える津波にもかかわらず、それほど大き

な被害は出なかった。釣りをしている者の姿は全く無い。賢は防波堤の近くまで行くと、車を停めて、そこから歩くことにした。波が高い。賢は、こんな所に海の老人が現れるのだろうかと思っていた。3人は防波堤から突き出た突端の手前の岸壁に佇んで海を眺めていた。波のしぶきが飛び散る。暫くすると、ムクウはいつものボートで現れた。それは梓と康子にとっては不思議な光景だった。波の高さがボートを超えているのに、小さなボートは波の影響を受けずに、水平の姿勢を保ったまま、音もなく岸壁に向かって近付いて来る。まるでモーターボートのようなスピードで接近して来た。

「やあ、賢、久しぶりだな。元気そうじゃないか。ここまで呼び出して、済まなかった。札幌付近は賢の周りを否定的な要素が取り囲んでいるから、ここにしたんだ。ワシにとっても、ここの方が都合がいいからな。そっちは梓と康子だね」

ふたりは初対面の人から直接自分たちの名前を呼ばれて驚いた。

「ムクウさん、どうして僕たちをお呼びになったのですか？」

「うん、今がその時期だからだよ。梓、君の役目は分かっているね？」

「あなたは、どういう方ですか？わたくしはあなたの質問に答える必要があるのでしょうか？賢さん、わたくしはどうすべきだと思いますか？」

「梓、それは僕にも分からない、それは君の感性で判断したらいいよ。ただ、ムクウさんは悪い人ではないということだけは分かっている」  
梓は応えた。

「わたくしの役目は・・・この人生での役目ですね。それは、賢さんの女房役になることだと心得ています」

「うん、分かっているようだな。じゃ、康子、君は自分の役目はなんだろうと思うね？」

「私は何のことなのか分かりません。私はずっと一人で生きてきました。賢さんとのことをお訪ねでしたら、わたしには何も応えられません」

「君は、賢のことを好んでいるだろう？賢が、大勢の女性に愛されていることは分かっているか？」

「それは、知っていますけど・・・」



「それは、賢が全ての人を愛しているからだよ。君もそれを知って、賢と付き合うといい」

「それは、私の勝手だと思いますが・・・どうして、個人的なことにまで、口を差し挟まれるのですか？」

「それは、君が賢に接触しているからだよ」

「何のことをおっしゃっているのか分かりません」

「まあ、その内分かるかも知れないから、今はあまり考えなくてもいい。さて、賢、今がその時期と謂うことだ。賢は人間の本来持っている機能の内、かなりのことを思い出したようだが、まだ、現象界のことしか扱えていない。想念も受動的な部分が多い。これから、毎日、ワシがおまえにいくつかの必要なことを伝える。おまえの知識で欠落している部分と、まだ開眼していない能力だ。もうあまり時間が無いから、そのつもりで、每晚時間を確保しなさい。今の賢なら1ヶ月もあれば十分だろう。明日から、一人で寝なくてははいけない。おまえが寝ている間にも、おまえの意識に働き掛けてゆくからな。梓は、今から1ヶ月の間、幽霊の部屋で寝なさい。康子も邪魔をしてはいけない」

梓と康子はキョトンとしている。賢は直感的に、ムクウが非常に重要なことを伝えているのだと思った。

「分かりました。そのように致します」

「賢は理解が早いな。今日は折角ここまで来てくれたから、君たちにとっておきのご馳走をしよう。この話は、君たち2人、そして、賢にとっても興味のある話だろう。男と女の話だ」

賢は、ムクウが何を言おうとしているのか、興味津々だった。2人の女性は、自分たちの身に迫るテーマなので、ムクウが何を話すのかと耳をそばだてた。

「男と女は、元は一つだった。それが分かれて二つになった・・・それは分かるだろう・・・君たちにはここは寒いだろう、近くに美味しいものを食わせる店があるから、そこに行こう」

3人はムクウの後に附いて岸壁を歩いた。車の所に来ると賢が言った。

「ムクウさん、僕の車で行きませんか？」

ムクウは言った。

「いや、ワシは、メカものに乗るのは苦手じゃ。ワシの居る世界には何でもある。君らがUFOと呼んでいる乗り物も在るが、ワシは苦手で、だから、あんな舟に乗っている。ワシは、歩いてゆくから、後を附いて来てくれ」

ムクウはそう言うと、とっとと歩き始めた。賢は2人の女性を乗せて、車で後を追った。速い。とてつもなく速い。スピードメータは50キロを超えている。梓が言った。

「ムクウさん、本当に歩いているのかしら？」

「多分、僕らが泰山に行ったのと同じような方法だろうな」

「内観部長、泰山って何ですか？」

「中国で、北京から泰山まで日帰りで行って来たんだ。当然頂上まで登ったよ。泰山のことを知らないと分からないだろうけどね」

「わたしが、すすき野の大通りの上空に連れて行ってもらったのと、同じかしら？」

「そうだよ、同じだ。ムクウさんは、こういうことが、表面的なことだと言っていたね。これから、いろいろ教えてくれるって・・・」

「内観部長、私にも教えていただけるかしら？」

「自分で訊いてみるといいよ」

やがて、ムクウは一軒のスナックに入って行った。それは大通りから横に逸れて、辺りに建物の影が全くない静かな場所に建っていた。

賢たちはスナックの前の駐車場に車を停めると、車から降り、スナックのドアを開けた。厚い木で出来た、重いドアだった。中に入るとムクウが一人、カウンター席に座っている。カウンターにはムクウより、少し若いように見える目の穏やかな男性が立っていた。若作りだが、隠しよのない永年の皺が顔に刻まれている。賢たちが入って来ても、3人にちらっと視線を投げ掛けただけで、歓待の言葉は口にしなかった。ムクウ以外に誰も客は居ない。賢はムクウの横に座った。賢の横に梓、その横に康子が座った。

「君たち、何か飲みたいものを注文するといいよ。ここはワシがおごる

から」

賢はソーダ水、梓も同じものを注文し。康子はビールを頼んだ。

「さて、そもそも一つだった男と女が、二つに分かれたのは、何のためかだが、その中に欲望を引き起こさせるためだった。何故それが必要かという、欲望は牽引力になるからだ。そう、引き合う力だ。黙っていても引き合う。しかし、男女両方が自由な状態で引き合っているのは、自由空間では結合が難しくなる。分かるか？例えば、もし、どちらかが相手の中心を外れて、相手を引き寄せようとすると、回転が生じてしまう。それは純粹に相手を求めているときに起こる。その時の条件次第では、両方が永遠に回転して、結合できなくなってしまうんだ。それを避けるために、一方を安定的な形にした。つまり、一方を動かないようにしたんだ。それが女性だ。だから、この世界では女性の性格は安定を望み、現状を保存し、そこから様々なものを育もうとする。一方、男女ともに安定的特性を持たせると、たとえ引き合っても、男女が一つになるのは難しい。それで女性の安定性とは反対に、男性の方には自由性を与えた。それは全ての存在が本来持っている性格だ。その自由性で、男性は動かない女性に向かって突進する。そして結合する。その突進は、競争を生み、自ずと、優性の者が目的の女性に到達できる様な仕組みになった。その結果、男女の関係の中に発展の形が組み込まれた。それが男性と女性に与えられた性質だ。男性、女性と云っても、この世界の男女を連想しては駄目だ。男性性、女性性という程度に理解した方がいい。只、生殖の段階ではその男性性、女性性がそのまま働いている。それは一番原型に近いからだ。そう謂うわけだから、女性が女性たる状態で在るためには、自分の特性が本来受容的であることを理解しておく必要がある。男性は、自分が自由性の高い存在であることをな。そのように特性付けられて生まれた男と女は、当然のことながら、自然に引き合う。それは一つになろうとする欲求だ。だから、男女の間では、欲望が非常に重要になる。この世界に存在するものは全て、一つの根源にある。それは全てが一つということだ。人は元々、大自然の中で、全てのものに対して執着するように創られてもいるのだ。それが、男女が分けられた

理由の一つだ。全てを展開するとき、一つに戻る方向の力が無いと、完全に分散してしまって、この宇宙も存在できなくなる。何かが存在しているということは、その何かの中に一つになろうとする力が作用しているということだ。重力がある理由もそこにある。現在の科学者がそれを理解できていないから、統一場の理論もできあがらない。意識が全てを繋げているという認識に立脚していないからだ。・・・話が少し逸れたが、兎に角、男と女は引き合うように出来ている。それで、自然界はどのようにこの仕組みを使っているかということ、例えば植物、ちょっと例としては難しいけどな。植物が受粉するときはなぜあれほどまでに苦労して、おしべが花粉をめしべに受粉させようとするかを考えてみるとよく分かる。風、昆虫の羽、いろいろな媒体を手段として受粉を試みる様に出来ている。これは仕組みに基づいて、創られているからだ。その受粉を通して、種を発展をさせようとしているからだ。そうでなければ、あの仕組みは要らない。しかし、もしそれが無ければ、植物の種としての停滞、すなわち確率的衰退による死を意味する。そこには相矛盾する要素を組み込んだ仕組みがある。全ての花粉がめしべに到達したのでは、そこに発展性がない。確率的なものだけではなく、可能性として、より高いレベルのものが、自分に到達するのを、めしべは望み待っている。そのように創られているのだ。動物はもう少し随意的だ、本能と称する本来の意識の活動で、種の繁殖を目指した仕組みが組み込まれている。それは本能的な欲望が作用することで達成される。その欲望は、強者生存のルールに基づいて、種の繁栄を果たそうとする。いずれも上に向かって働いているのだ。では、この人間社会はどうかというと、人間には思考が与えられている。その思考は、本来的な意識の作用に、方向付けを与える仕組みとして組み込まれている。人間は他のどんな動物とも異なる。それは意識の作用と思考の作用を独立に扱えるようになっているからだ。女性には種の保存だけでなく、自分の本来の相手を求めるような仕組みが組み込まれている。それは、安定性の要求の上に、発展性を望む意志だ。女性は強い男性、頭のよい男性、指導力のある男性、いろいろなことで優位に立つ男性を求める。中には、癒してくれる男性を求

める女性もいるが、それは後で話す、別の衝動だ。一寸矛盾しているように感じるかも知れないが、本来の相手が特質として、優位な要素を具備した形で出現するのを待っている。男性はどうかと云うと、只むやみやたらに女性を求めているだけではない。それは動物的な、衝動だ。それも必要で、それがなければ、この3次元では、次への発展は望めないがな。普通は、より美しい女性、より理知的な女性、可愛い女性、献身的な女性、様々な理想的な女性を求める。しかし、男性も女性も、そういう表面的なものを求める段階は、動物とそう違わない段階で、より人間的な者たちは、愛を探す。愛とは、相手とのつながり、相手と一体になろうとする意志だ。それは肉体的な性欲として現れたり、所有欲として現れたりするが、本来は、全てを許容する大きな器として現れてくる。それが愛だ。そして、それはやがて全ての存在物への愛として確立してくる。それが本来、人間に特性として植え付けられたものだ。さて、話は少し理屈っぽくなりすぎたから、もう少し、具体的な話に戻すと、人間は、幼少の頃は自分というものが分からない。すなわち、自我が確立していない。だから、欲望という宝は、烏合の中でのもので、皆がああだから、自分もそうしたいーという程度の欲望に過ぎない。あるいは社会が教え込んだ、欲望の形を踏襲しているに過ぎない。それから青年期になると、自我が現れてくる。本来の自分の在るべき姿が蘇ろうとする。ところが自我が現れる前に、社会が人間を、社会に適合するタイプのマシンに改造してしまっている。そこで、青年期には、混沌な状態が起きる。それは、全体として一体の状態から、個々に分離してゆく段階における葛藤で、それが暫く続く。そして、その直ぐ後に、異性と一体化したいという欲望が顕現してくる。その前から現れているものもあるが、それは制御不可能なものとして出てくる。夢精や愛夢だ。それを経過すると、男も女も自分の好きなタイプの相手を求め始める。本来は生誕前に計画された結合パターンがあるのだ。誕生後そのカップルと一緒に生きると、生活面での共同体を構成するだけでなく、自分たちの魂としての発展を共に助け合って、促してゆく相手となるはずだ。しかし、それが現実にはそうはいっていない。社会の仕組みがそれを阻んでしまっ

いる。それで、人間は、外見や感情にその判断基準を置く。だから近年は計画された相手を見いだせないケースが非常に多い。そんなとき、悲しいかな、潜在意識が過去世での記憶を追って、好きな相手の内、最も自分の望むタイプの相手を求めるようになる。それが現代の世界に起きていることだ。その結果、外国ではステップファミリーなどという崩壊した、寄せ集めの家庭を作り上げる。しかし、それもかならずしも、否定されるべきものではない。結果として表れた。全体としての一体性を作り上げる道程の一つの形なのだ。好きになれば直ぐに結婚し、そして、気に入らなければ性格の不一致などと云って、直ぐに離婚する。離婚した後で後悔する。その繰り返しだ。それは本来の相手に巡り逢っても、それが自分の求めている相手だと認識できないからだ。それが認識できなければ、その相手とは結びつくことはできない。その結果、たとえ結婚していても、夫婦で全く異なった価値観を持ち、全く異なったものを指向し、別の部屋に寝起きする。それは一体となるべき相手でなかったことを意味している。しかし一体になることだけが目的ではない、だから、その本来の相手でなくても、別の片割れでも一緒に生きることができる。そして、それは別の可能性をもたらす。本来の片割れと、今世で一体化できなくても、これから繰り返される数多くの誕生の中で、一体化できるはずなのだ。今世は自己の愛の修練のための舞台と捉えればいい。なぜそれがいいかというと、全ては一つだからだ。自分の相手と思っている存在も全体の中から分離したものだ。本来は一つだ。相手の中にもその全体性を見いだせれば、本来の片割れと一体化する必要はない。結婚相手はそれでいい。それでは、現代に生きる男女は本当の一体感、本当の愛の成就を達成できずに、この人生を終えてゆくのかと言うと、その通りでもあり、また、別の生き方も可能なのだ。それは恋人と謂う関係、友達と謂う関係、この関係の領域に生きること、これが本来の一体化と歓喜を生み出す源になると謂うことだ。純粋な意味での恋人・・・これは肉体的な関係で謂う愛人などのことではない。友人の意識を高めた究極の姿だ。友人は同姓でも、異性でも同じだ。それは愛を凝縮したものだ。相手がそこに存在するのではなく、相手と共にある

ことが、自分が存在すると謂うことを意味している。相手が居て嬉しいのではない。相手が共に居ることが存在の意味なのだ。それが実現できると、自分としての個は失われ、全体の中に融け入り、その結果、逆説的だが、本来の自分が現れてくる。それが友人と恋人の意味の深いところだ。本来は夫婦とは、相手が友人であり、恋人であり、そして、生活を支える協力者であるべきなのだ。しかし何度も言うが、現代の社会がそれを許さなくなっている。悲しいことだ。だから、社会のがんじがらめな仕組みの中で、自分を高めてゆくには、友人を持つこと、恋人を持つこと、それが大切なのだ。どうだ、3人とも分かるか？これは話としては難しくないだろう。現実的なテーマだからな。さあ、マスター、うまいものを出してくれないか？」

マスターと声を掛けられたカウンターの男は

「はい、先生」

と応えると、3人の目の前に、美しい色に彩られた料理を、次々に出してきた。

「君たち、料理を食べなさい。これは私のもてなしの心だ。そして、マスターのもてなしの心でもある。さあ、食べながら、続きを聴きなさい。この人生で学ばなくてはならないのは、純粹性と、集中力だ。愛は初めから与えられている。自分がその気になれば直ぐに現れてくる。自分が相手を愛せば、相手も自分を愛する。知識や、道徳性も本来自分の中に埋め込まれているものだ。自分の本性が現れてくれば、自然に本来の姿を顕す。しかし、純粹性は難しい。それは生まれたときから、どんどん濁ってきているからだ。この社会の仕組みの中で汚れてしまった心を、元に戻すこと。これには努力がいる。それと、集中力。これは自分の意志する通りに物事を成し遂げるために絶対必要なことだ。修行しなくては達成できないかも知れない。その場合は忍耐力が必要になる。社会の要請どおり、外部の意志に従った形では何でも自動的に達成された様に思える。自分の意志とは別にな。だが、自分が意志するとおりに物事を達成しようとしたら、強い集中力を養う必要がある。賢はそれをほとんど達成している。しかし、その方向をどこに向けるかの意識が不足して

いる。これから、それを学んで貰う」

そう言うと、ムクウは再び、3人に料理を食べるように促した。その料理は今まで、見たことも、食べたこともないものだった。美しく、言葉で表現することが難しい味で、美味だった。梓が言った。

「マスターとっても美味しいです」

マスターはにっこり笑った。梓はムクウの方を向いて尋ねた。

「ムクウさん、質問があるのですが、妻とは一体何なんでしょう？女房とは？」

「うん。妻は、夫と生計を共にする、共同生活者であり、家庭を作り、守る存在だ。大体みんなそのように生きているだろう？」

「妻であるということは、夫との間に愛を生み出しにくいということなのでしょうかね？」

「それは、将に意識の問題だ。さっき言ったように、妻であるということと、恋人や友達であることは別だ。だから、妻であり、恋人であり、友達である様になることも可能ということだ。梓、君は女房役に徹するつもりだと言ったね。それはそれでいい。だが、同時に友達、更には恋人にまでなることを目指すといい。賢との間なら、それも可能だ」

それを聴いていた康子が言った。

「私も、田辺部長の様になりたいのですが、どうしたらいいか教えてもらえますか？だけど、私は、誰かを愛したら、他の人を愛することなんて出来ませんし、好きな人が、誰かを愛しているのには耐えられそうにありません」

「康子、君は、社会の通念の中で、愛とはこうあるべきだと考えていて、自分の中に起きてきている、愛の感情が、その在るべき形にならないので、ジレンマに陥っているのだろう。その上に、独占欲で、相手を独り占めにしたいという心が強く作用している。愛には通念や教義を適用できるような余地は無い。愛するということは、只愛するということなんだ。他の条件付けや、説明は一切必要ないし、自分の欲望で愛の純粋性を歪ませてはならない」

「私は・・・賢さんのことしか、頭にないのです。他の誰かのことは



一切思い浮かばないし、私はそれでいいと思っています」

「それは、間違いがないだろう。愛しているということは、愛しているということ以外の何ものでもないんだから、他に何かを求めては、純粋性に濁りを生じてしまう」

「でも、いつも近くに居たいし、できれば一生、共に生きてゆきたいのです」

「それが、欲望から出た条件付けだということに、気付かないといけないな。愛するだけでいいんだよ。他には何も望まないことだ。死んでもいいとか、あなただけを愛していますとかそういうことは、相手を縛り、自分を縛り、社会の通念に従おうとすることになる」

「わたしには、できそうにありません。あまりにも悲しすぎるから。だって、賢さんは他の人を愛していて、他の人と連れ添っていて、わたしの入る余地はありません」

「只愛すればいいんだよ。賢だって、君を愛しているだろう。只愛しているだろう？」

康子は、まだ納得いかないようだったが、とうとう言葉に詰まってしまった。

賢と2人の女性は、ムクウに札を言うと、スナックを出た。折角苦小牧まで来たのだから、市内を見物して帰ろうということになった。康子は苦小牧に詳しかった。北海道一の工業都市というだけあって、あちこちに工場が林立していた。

「苦小牧は一見、工業だけの都市のように思われていますけど、自然環境作りにも、凄く積極的なんです。水も美味しいし、漁獲量も多いんです。ホッケ貝が沢山捕れるんですよ。東北大震災があってから、益々苦小牧が重要な港になってきました」

康子がガイドを買って出た。賢が運転して、街を廻ってから、ウトナイ湖を見て、支笏湖に向かった。2時過ぎに支笏湖に着いた。

道路を右に折れて湖の周りを周回した。北側には恵庭岳が見え、湖の向こう岸には小山に囲まれて、風不死岳と樽前山が見える。既に山々はすっかり紅葉していた。支笏湖は底が見えるほど透き通っていて、怖いほ

どだった。康子が、この湖は琵琶湖の次に水量が多いと言った。

「琵琶湖に比べれば、かなり小さいのに水量が多いのは、深さが深いからに違いないわ」

梓が言った。康子は、湖の名前の由来はアイヌ語の「大きな窪地」を意味する言葉から来ていて、それは湖の水源、千歳川の昔の呼び名だと言った。

「アイヌ民族は支笏湖のことを「シコテムコ・エアン・パラト」って呼んでいました。彼らの心のふるさとで、「シコツ川の水源で、そこにある広い湖」と称えていたのです」

「雪坂さん、詳しいね」

「わたし、寂しいときには、よく、一人でこの湖に来て、水面を眺めていました。心が洗われるようで、悲しみも洗い流してくれるようでした。この湖の由来を勉強したりして、ここがとっても気に入ってしまいました。ここは、温かい水が深い底に溜まって、水面を暖めるので、いつも湖面の水が温かくて、氷が張らない湖なのです。だから、この水に抱かれて、心を温めてもらっているような気がして……」

康子の言うように、その透き通った水は澄み切っていて、その割に暖かさを感じた。賢は心が洗い清められているような感覚を覚えた。

3人が途中で夕食を摂り、賢の家に戻った時は、7時を回っていた。賢は康子に泊ってゆくように言った。康子は嬉しかった。客間にはベッドがある。先週、梓が来たときに、いつでも3、4人が泊まれるように寝具を用意した。梓は康子にパジャマを渡し、客間のベッドメイキングをした。まず、康子に入浴させ、続いて賢が入り、梓は最後に入浴した。ムクウが言ったように、この日の夜から賢は一人でベッドに入るようになった。意識を集中し易く、瞑想で内観する時も完全に一点集中できた。まず、省察を行い、それから、意識を祐子や亜希子に向けてみた。久々に祐子からの応答があった。

「あなたなのね。お元気ですか？亜紀から聞きました。私を救ってくださるために、いろいろなことをなさってくださいましたんですね。インドでの爆破が尾を引いていると聞いて、心配しています。心の暗い人たちは、

自分たちに仕掛けられた攻撃には、必ず仕返ししようと考えますから、本当に気を付けてくださいね。特に、相手は、実行者が日本人だと認識しているようですから、場合によっては、日本の中にまで手を伸ばして行くかもしれません。油断は禁物ですよ。こちらは、あれ以来、二つの種族の間の衝突は起きておりません。国全体が、安定した方向に向かいつつあります。ジェノサイドの実行犯達はほとんどコンゴに亡命していて、そこで、ジェノサイドを逃れてコンゴに避難していたブチの難民を自分たちの支配下に置いて、自己防衛を図っているようなのです。そういう情報がこルワンダにも入ってきています。現在も未だ続いているジェノサイドの余波に怯えながら、過去の遺恨を取り除くということとは並大抵のことではないのです。問題は、心の修復です。あの時の衝撃から今も立ち直れないで、悲しみと恨みの心で生きている人たちが沢山いるのです。その上また起きるかも知れないジェノサイドへの不安に怯えている人たちの心をどうしたら癒してあげられるか、日々考え続けています」

「それが、今、一番困っていることなのか？」

「彼らの心のケアをどうやっていいのか、本当に迷っているのです。言葉だけじゃ十分じゃないのです。亜紀が時々、苦しんでいる人の意識に語りかけて、癒しを与えてあげていますが、何しろ、トラウマを背負った人の数が、あまりにも多いので、本当に困惑しています」

「そうか、今度、多くの人に対して、言葉を超えて意識に直接語りかける必要が出てきたら、僕を呼び出してもいいよ。できる限り協力するからな」

そんな中でも祐子の事業「フルマ」は巧くいっているようだった。賢は亜希子にも繋いでみた。亜希子は祐子の支援をしながら、エチオピアに出向き、その荒んだ地域の魂を鎮めることに全力を注いでいた。既に2回目の訪問を終え、3度目の訪問を計画していた。

「エチオピアはいろいろな風土病があるので有名なところだろう。なぜ、そんな危険な処に行くんだ。他にも助けを必要としている地域が沢山あるだろう」

「私たちは日本人です。エチオピアの人たちの生きざまを知らない日本人なのです。行ってみるとわかります。あそこに生きている人たちの多くが、日々の糧にも苦しむ人生を余儀なくされているのです。私がエチオピアを選んだのは、エチオピアの子供たちが貧困に苦しんでいる映像を見たからなのです。その時に決めました。彼らの苦しみを、運命とか宿命とか、カルマなどと謂った突き放した言葉で表現したくないのです。実際その国の中に入って、そこでの生活を共に体験して、苦しんでいる人たちを、一人でも多く救いたいのです。そうは言っても、無防備で行くではありませんし、入国時には必ずワクチンの接種をして、アジス・アベバに1日以上滞在して、エチオピアの気候に身体を慣らせ、目的地の病気の感染や蔓延などを調べてから、現地に向かうようにしています。あなた、エチオピアの人たちの平均寿命をご存知ですか？50歳なんですよ。日本では、まだ働き盛りの年齢なんです」

「くれぐれも注意しろよ。僕に何かしてほしいことは無いかな？」

「ありますわ。時々、私たちを励ましに来ていただきたいの。テレポーションでね。お姉さまは何もおっしゃらないけど、貴方にお会いしたいという気持ちが、手に取るようにわかるのです。わたくしたち2人に、逢うだけのために、是非いらしていただきたいですわ」

「うん、分かった。僕もまだ北海道に転勤になったばかりだから、もう少しして落ち着いたら、一度君の所に行くよ。だから、いつも元気で頑張れよ」

亜希子との通信を終えると、待っていたようにムクウからの言葉が脳裏に展開された。それは愛についての説明だった。

「賢、愛は、今日話したような簡単なものではない。今日の話は、誰にでもわかるような説明にしたんだ。彼女たちがいたからな。おまえは、愛を感情とリンクさせないで、作用させられるようにならなくてはいけない。愛しているとか、抱きしめたいとかと云うことじゃないんだ。そこに存在していること自体が喜びにならなくてはいけない。自然に接しなさい。あらゆる存在と語りなさい。あらゆる存在を自分の内面に招きなさい。瞑想はそのためにある。昼間の説明と矛盾していると思うかも

しれないが、意識的に愛することから始めなくては、短期間での愛の拡大は望めない。賢、お前には、十分な時間が無い」

「わかりました。今までは、愛することは、自分から自然に湧き出るものだと思っていました。努力は必要無いと考えていました。これからは、意図して、あらゆる存在が今ここに存在していることに、喜びを覚えるように、意識します」

この日のムクウからの連絡はそれだけだった。賢は休むことにした。しかし、床についても、意識ははっきりとしていて、あらゆるものが認識できるのが分かる。梓からも、康子からも怯えの感情が出ているのが分かった。賢は2人に愛の念を送り、ふたりを順に抱きしめた。康子の怯えは直ぐに収まり、寝息を立て始めた。梓の怯えはなかなか収まらなかった。梓の意識の中に、その部屋の亡霊の姿が描かれていた。それは賢が見た亡霊ではなかった。梓が想像の中で造りだしたものだった。賢は梓の意識に現れている亡霊を取り除いた。そして、梓を暖かい愛で包んだ。漸く梓は眠りに落ちた。

翌日は梓とVEAS館に出掛けることになっていた。賢は康子と一緒に行くかどうか聞いてみた。康子は喜んだ。3人が家を出たのは9時過ぎだった。VEAS館は10時にオープンする。日曜日だったが、あまり多くの人はいなかった。康子が言った。

「ディズニーランドなら、もうとっくに長蛇の列が出来ているはずね」この日は風の体験をすることにしてあった。待ち行列の中で梓が言った。「風って、分かりそうで分からないものですね。風って何なんでしょう？単なる分子の異動じゃないでしょうか？賢さん、どう思いますか？」「うん、僕が思うに、風は、エーテルから起こる分子の移動だと思う。それは、普通僕たちが云う風、つまり空気の流れ、これが一番分かりやすいけれど、その風を考えてみれば理解できるだろう。それ以外にも動きに関係するものは全て5大の「風」に関連を持っていると思うんだ。僕は子供の頃、スワミに「風」の大切さを教わった。そして、この世界が生まれるときに起きる初めの振動、すなわち音、これは「風」によって伝えられ、全ての存在が生まれたのだとも教わった。つまり、この3

次元世界の事物は「風」の力で生み出された — 風が吹いて、生まれてきたということのようだ。5大の風は、人間で云うと、その中心は胸にある。スワミは呼吸の大切さを教えてくれた。肺は息を吸い、そして吐く。これが人間が外の世界と常にエネルギーを交換するポイントで、常に風である呼吸を通してそれが行われる。そして、目に見えないエネルギーも5大の「風」を通して伝えられる。我々は呼吸と同時に、プラナーというエネルギーを吸い込み、吐き出している。プラナーの供給を受けなければ人間は生きられない。だから、「風」は人間がこの3次元世界に生きるのに必要な、外界との連結のインターフェースのような機能を果たしていると思うんだ。これがリズムを乱し、バランスを失うと、呼吸が乱れ、エネルギーの流れが滞って、生きることが難しくなる。分かるかな？」

梓は必死に考えていたが、吐き出すように言った。

「賢さん、それは今はとても理解できません。後で、もう少し詳しく教えてください」

康子が言った。

「私には何にも分かりませんが、只、賢さんと一緒に居られればそれだけでいいです」

やがて、ゲートがオープンし、3人はいつもの通り、簡単な問診の身体検査を受けた。「風」の体験をしようとしている者はあまり多くなかった。賢たちの前には2組のカップルが附いているだけで、3人は直ぐにエントランスから「風」のブースに入ることができた。生物のブースと異なり、全て単独席で体験することになった。天井が巨大な半球状のスクリーンになっていて、10席が全て外側に向けて設置されていた。椅子の形状や構造は、桜や水の体験と同じだったが、その椅子に座ると、自分が球形のドームの中にすっぽり入り込んだような印象を受け、自分だけしか居ないような感覚を覚えた。選択肢は無く、椅子にスタートとストップボタンが設けられているだけだった。ヘッドフォンと3次元グラスを装着すれば後はスタートボタンを押すだけだった。3人は前の4人に続いて一緒に席に着いた。後で2人が席に着いて、合計9人、1席

残した状態でスタンバイ状態になった。賢はスタートボタンを押したが、ヘッドフォンを通して、暫く待つようにアナウンスが聞こえた。シミュレーションは全員がスタートボタンを押した段階で同時に展開されるようだった。やがてガイダンスの声がした。男のかすれた声だった。

「ようこそ風の世界にいらっしゃいました。これから暫くの間、あなたは空気の一部になって頂きます。自分の意識を集中して空気になり切ってください。風が生まれるのはあなたに何らかの力が働くときです。その結果、空間の中であなたが動くのです。あなたは別の空気の圧力を受けて、次第に押しつぶされたような状態になってゆきます。あなたの身体は今にもはち切れそうになってゆき、そして蓄えられたエネルギーが、圧力の弱い所に向けて、あなたを押し出します。その瞬間、ごーっと音を立てて、あなたはそちらに向かって移動します。そうですあなたは風になったのです。あなたは、自分が凄いい勢いで動いていくのを意識します。あなたはいろいろなものにぶつかり、それを押さえ、横からすべり抜けて、力の弱い方に向けて動きます。あなたが動くと、あなたの居た場所の圧力が急に弱まり、そこに別の空気が流れ込んで来ます。あなたが移動した場所は、急にあなたが押し寄せて来たために、圧力が高まり、エネルギーが充満して、また、圧力の弱い部分に向けてあなたを押し出します。それが次々に起こり、あなたは、他の空気と一体になって、大空を駆けめぐってゆきます。風が吹いているのです。風となったあなたは草の葉に触れ、それを押します。草の葉はあなたに押されて、揺れます。あなたは池の水面にぶつかります。水面は少し窪み、またすぐに元に戻ります。それによって出来た波が、次第に水面を伝わってゆきます。風となって動き回っているあなたは人間の造った家の窓ガラスに次々にぶつかります。窓ガラスが押され、元に戻り、そして、がたがたと音を立てます。あなたは大空を走り、海の上を走り、島を通り抜けて、海の上で、周りの空気に阻まれて、次第にスピードが落ち、やがて、また何も無かったかのような静止した状態に戻ります。あなたは北緯30度付近の上空にまで達しています。そこには赤道付近で上昇して、そこまでやって来た空気が滞留しています。あなたはその周囲の空気と共

に下降して圧縮された高気圧になってゆきます。このあなたが一体になった高気圧から赤道方向に向けて、あなたは風となって吹き出して行きます。あなたは地球の自転で出来るコリオリの力を受けて東風になってゆきます。風となったあなたが暑い気候の海上から上昇してくる水蒸気達によって上に押され、またそれが周囲の温度の影響で下降して、あなたにうねりの波動を起こさせます。するとそのうねりの谷間になったとき、一気にあなたの仲間の空気があなたに入り込んで来て、そこに渦が出来てきます。渦はあなたの仲間を吹き出し、その結果また気圧が低くなって、空気を呼び込み大きな回転した低気圧になります。あなたは台風になりました。大きな渦の中心には静かな空気の上昇があります。暑い海上からは水蒸気が上昇流に乗って上空に向かって昇ってゆきます。上空では空気中の水蒸気は凝結し、熱を放出します。その時発生した熱は、周りの空気を熱し、その暑い熱気が、また高い気圧を発生させます。凝結した水蒸気は雨となって、海の上、そして地上に激しく降りつけます。軽くなった空気は更に上昇して、上空の空気の気圧を押し上げます。海上では周囲から湿った空気が中心に向かい、上昇し、さらに熱を放出しエネルギーを与えつづけます。上空の高気圧から吹き出された空気は大きな循環を作りだして、次々に上昇気流を発生させてゆきます。これが繰り返され、あなたは次第に発達してゆきます。あなたは台風として、海を叩き、大きな波を発生させます。あなたは偏西風に乗って移動してゆきます。やがて島々が現れ、そこにある植物たちに凄い勢いでぶつかってゆきます。何本かの大きな木々も根本から引き抜かれ、人間達が作った細長い電柱がなぎ倒されました。あなたは山や家々にぶつかり、次第にスムーズな回転ができなくなってゆきます。海上や地上の温度も初めの頃ほど高くなって、上昇気流も上手く生まれなくなってゆきます。やがてあなたは力を失い、だんだん緩やかな風になってゆきます。終にあなたはまた、元のように静かな空気に戻ります。・・・さあ、もう一度、自分が空気であることを強く意識してください。これからあなたは只そこにあるだけの存在として、心を空しくしてください」説明が終わると50インチのスクリーンに静かな田園風景が映し出さ



れ、続いて波一つ無い湖面が映し出された、その湖面に僅かなさざ波が立った。画面は地上を映し出した。木々が揺れ、波が立つ風の流れを感じさせる映像が映し出された。賢達3人は自分が風であることを受け入れた。風は海の上を吹き、地上の草花を揺らし、砂を巻き上げて吹き抜けてゆく。その流れが自分に向かってきて、自分もその中にいるような感覚になった。やがて風となった自分は次第に穏やかな流れになり、微かに草の葉を揺らし、そして止まった。それは海の上だった。それから暫くの間、静かな時間が過ぎた。賢は次第に周りの空気から圧力を受けて来るのを感じてきた。それは椅子の周囲に仕掛けられている装置が引き起こしているようだった。その力は次第に強くなってきた。まるで身体が押しつぶされるような感覚を引き起こした。次の瞬間、締め付けられる力の解放と同時に前に押し出されるような感覚になった。それとは逆に画面の映像は迫ってくる。周囲からゴーツと音が聞こえる。自分が引っ張られるように前に、右に、左に移動している。本当に、自分が風になったような実感が湧いてきた。次第に勢いが増し、画面には草花が揺れ、木々が揺れる映像が映し出された。目の前に水たまりが見えた。池だ。池の水面に突っ込んでいった。水が窪み、波が立った。自分の作った波が池全体に広がって行く。池の上を掠めて通り抜け、家々の壁にぶつかった。壁にはガラス窓があり、それががたがたと音を立てた。家の壁に沿って、流れ、上空に出て、電線を揺らせ、路地を通り、塀の間を通り抜けて、畑に出た。束ねられた稲束を掠めて畦に出た。乾いた土の上を走り、土埃を巻き上げた。手前に山が迫って来る。山に沿って駆け上る。木々を揺らせ、頂上に出ると、眼下に海が広がっていた。山を駆け下りてゆく。鷹が飛んで来て、自分の上に乗って悠々と浮かんでいる。やがて海の上に出た、次第に波が立ってゆく、海鳥が気持ちよさそうに身を翻して飛んでいる。島が見えてきて、椰子の木の葉を揺らせ、また海の上を飛んでゆく。やがて船が見えてきた。船体が波に揺れ、上に掲げてある朝日の旗にぶつかるように掠めて通り抜けた。また暫く海の上を走り、上空に昇った。日は落ち、また昇り、5日間が経過した。長い旅が終わった。動きが止まり、また静止した状態になった。暫くそ

ここに居ると、自分がゆっくり上昇してゆくのを感じられてきた。周囲には熱気を感じられる。周りから集まってきた空気の圧力で、再び窮屈な感覚を覚えてきた。だんだん圧迫されてくる。自分が次第に周囲の空気と共に下降して、益々圧縮されてくる感覚が強くなった。さっきと同じように、突然堰を切ったように一気に押し出された。自分が再び風になったのを感じる。横から力を受けているのを感じ、その力に従って動き出している。辺りは湿度が高くなり、水蒸気に包まれていて、次第に上昇してゆくのを感じる。そして、上昇すると急に周囲が冷たくなってきて、今度は下降が始まった。その動きがゆっくり繰り返され、うねりが起きた。自分がうねりの波動の最も解放された感覚になったとき、一斉に周囲から空気が流れ込んできた。それは自分と同じ空気だった。自分は押し出され、争うように引っ張られる方向に突進してゆく。その動きが激しくなって、どうやら、そこに渦が出来てきたようだ。自分が渦の中でぐるぐる回っている。中心では水蒸気が上昇流に乗って上空に向かって昇ってゆく。その周りを10席の椅子が一体になって大きく回転している。自分が大風として大回転を始めたのが分かった。渦は仲間の風を吹き出し、その結果また解放され空気を呼び込み、大きな回転した吸引力を作り出している。自分が台風になったのを感じた。上空で凝結した水蒸気は雨となって、自分たちの動きに乗って、海の上、そして地上に激しく降り付けている。これが繰り返され、回転する力は次第に大きくなっていった。台風と化した自分が、海を叩き、大きなうねりを作り出している。その自分を強い風がどこかに向かって運んでゆく。やがて島々が現れた。そこにある植物たちを強い力で揺さぶり、なぎ倒し、何本かの木を根本から引き抜いてしまった。草花を巻き上げ、小鳥や小さな虫たちを引き込み、渦の中に留めたまま海を越えた。やがて大きな陸地が現れた。一本の電柱が音を立てて倒れた。電線が切れ、火花が散っている。沢山の雨が降り注いでいる。乾いた土が水で覆われてゆく。街を通り過ぎ、畑を越えた。自分が運んできた草花、鳥たち、虫たちをそこに放り出した。そして、日が暮れ、夜が明け、1週間が過ぎ去ってゆく。台風となった自分は沢山の家にぶつかり、山にぶつかって、次第に

力を失ってゆくのが分かった。周囲の温度も、あの台風としての自分が生みだされたときほど高くなり、自分がだんだん緩やか風になってきた。そして3日が経過し、自分が元の動きのない状態に戻ったのが分かった。空からは太陽の光が燦々と降り注いでいる。自分はその光で熱せられ、穏やかな日差しを伝えるパイプ役になっている。全く動きが無くなり、自分の存在は無くなったように静止した。しかし、依然として、生きて、喜びに満ちていることは確かだった。全ての生命に自分を提供しているのを感じてきた。その時、画面に静かな野山の風景が映し出され、波のない鏡面のような湖面が映し出された。全くの無音の状態が続いてから、静かな、しかし掠れた男性の声が聞こえて来た。

「空気としてのあなたは風になり、嵐となって、この大地に潤いを与え、力を示しました。そして今、只存在しているだけの、静止状態を作りだし、自分の存在を表から消して、全ての生き物の為に、エネルギーを与える役割を果たし始めました。世界は平穏な状態になり、一日一日が過ぎてゆきます。全ての存在はあなたの存在を意識せずに生きています……これから、次第に元の人間に戻ります。時間を掛けて、このVEASのブースに入って来た自分を思い浮かべ、自分に返ってください……」

それから3分間ほどベートーベンの交響曲第9番第2楽章が流れ、フェードアウトした。3人は穏やかな雰囲気にもまれて呼吸を整え、3次元グラスの付いたヘルメットを外した。

3人はVEAS館の外に出た。梓が言った。

「凄かったですね。台風になって、自分が風になっているというより、風に吹き飛ばされているような錯覚を覚えました。でも、野や街を通り抜けるときはリアルでしたね。家にぶつかるときなど、本当にぶつかっているような気がしました」

康子も言った。

「凄かったです。今度の体験で、風がどんなふう吹き抜けるのかがよく分かりました。波って、あんなふうにして出来るんですね。今まで、台風は怖いとしか感じたことは無かったのですが、他の土地の生き物を

運んだり、土地に潤いを与えるんですね。自然って凄いですね」

「うん、そうだね。でも、君たちもそうかも知れないけど、あの映像と、周りの仕掛けだけじゃ、自分が風になり切るのはかなり難しいね。まあ、上手くできてはいるけどね」

梓が言った。

「そうですね。やはり、自分が意識的に、空気だとか風だとかになることが前提でしょうね」

「その通りだね」

翌朝、梓が賢の居る札幌支店の総務部にやって来た。梓は賢の方に視線を送りながら、康子の背をさりげなく通り過ぎ、安芸津の席の前に来ると言った。

「安芸津部長、おはようございます。私は本社から支社に配転になった田辺です。人事のことで相談があつて参りました」

安芸津は立ち上がると、恐縮したように言った。

「おはようございます。田辺部長、存じ上げております。いろいろお世話になります。どういうご用件でしょうか？」

「そちらの席、よろしいでしょうか？」

梓は、目線をサイドテーブルに移して言った。

「あつ、失礼しました。応接室の方で承りたいと思いますので、あちらの部屋に参りましょう・・・おい、奥日君、お茶だ」

奥日が返事をして、立ち上がった。梓は応接室に通され、ソファーに腰を下ろすと、おもむろに言った。

「実は、私が支社に配転になったのは、こちらに転勤されている内観部長の支援をする為なのです。ですから、内観部長には、支社の企画部に移籍していただきたいと思ひまして、お願いに参りました。それから、貴部に英語に堪能な女性がいらっしゃると伺っておりますので、出来ることでしたら、その女性にも当部に移籍していただきたいのです。急なお願いになりますが、ご了解いただけませんか？」

「私も、大体そうだろうと思ひていました。女性は雪坂康子のことですね」

「ええ、そうです。彼女は何か貴部に不可欠の業務をされているのでしょうか？」

安芸津は雪坂の業務内容を掻い摘んで説明してから、にやにやしながら言った。

「あの、内観という男は、曲者ですよ。女癖が悪い上に、変なマジックをやって、みんなの気を惹こうとする奴ですから、次長も気を付けた方がいいですよ。ところであいつはどういう役職になるんですか？まさか次長の上に着くなんてことは・・・」

安芸津は、内観が自分より上席に着かれぬか、気懸かりなようだった。梓は自分と康子が賢と一緒に入社していることを、安芸津が知らないので安心した。

「安芸津部長、内観部長はそんな方じゃないですよ。本社のMIプロジェクトでは、私は内観部長の下でサブリーダーを務めてきましたから、よく分かります。まだ役職は決まっていません。本社が11月1日付けの人事異動として通達を出すことになっています」

梓は、淡々と話を進め、安芸津の了承を得ると、さっさと帰って行った。その日の午後、昼食から帰った賢と康子を、安芸津が大声で呼びつけた。ふたりがサイドテーブルに座ると、安芸津が言った。

「おまえら、11月1日付けで配転になるから、そのつもりでいろ。どうせここにいても、仕事もないから、良かったじゃないか」

安芸津は嫌みたっぷりに言った。賢は言った。

「分かりました。そうすると、今週一杯で配転ということですね」

「当たり前だ。1日は日曜だから、月曜から支社の田辺次長の所に移籍して貰う。田辺次長は、何時からでもいいと言っていたぞ。俺も、これと云っておまえらに頼む仕事も無いから、今週中に荷物を移しておけ、同じビルの中だから、送別会はなしでいいな？」

「はい、分かりました」

康子は只、「はい」とだけ応えた。

ふたりはその週の木曜日までに必要な書類を全て10階に移動してしまった。安芸津の「送別会はやらない」という宣言にも関わらず、奥日

の音頭で、有志により非公式の歓送会を行ってくれることになっていた。賢は部長付きという肩書きを外されていて、只の担当者として転籍されることになった。家に帰ってそれを賢に伝えながら、梓は憤慨していた。金曜の昼、賢と康子は昼食を摂るために通りを歩いていた。紺の背広を着た2人の男性が前の方から歩いて来て、年配の方が賢に話し掛けた。

「内観さんですか？そちらは雪坂さんでしょう？」

「そうですが・・・」

賢が応えると、男は言った。

「月曜日に本社から移転になった碧瀬です。こっちは須崎です」

賢と康子はそれが、転勤してきた2人だと初めて知った。書類を運んだときには、顔を合わせなかったのが賢も康子も気付かなかった。

「書類を運んできただろう？顔を出してくれればいいのに」

康子が言った。

「3度ばかり行きましたが、いらっしゃいませんでしたけど」

「いや、別にいいんだけどね」

碧瀬は勿体を付けて言った。背の低い、体格のがっしりした40歳前後の男性だ。顔は四角く、鼻が大きく広がっていて、眼光が鋭かった。須崎は賢と同じくらいの年回りで、同じくらいの背丈、体格も賢と同じようだが、賢とは違い、額に縦の筋を2本刻みつけた、髭のそり跡の濃い、いかつい感じのする男性だった。2人は食事を済ませて帰る途中だった。賢と康子は軽く頭を下げて2人と別れたが、2人は威厳を保つようなそぶりで、会釈もせず去って行った。康子が言った。

「なんか、厭な感じですね」

「気にしない方がいいよ。主に土地の買収交渉を担当する人たちのようだな」

翌日の朝礼で賢は部の人たちに、感謝の言葉を述べた。

「皆さん、短い間でしたが、大変お世話になりました。僕は月曜日から支社の企画部に配属になります。同じビルの中なので、異動という感覚がありませんが、これからは本社から来た仲間と、MIプロジェクトの具体的な活動に移ってゆきます。また、いろいろご支援いただかなけれ

ばならないこともあるかと思いますが、その節は、よろしく願いいたします」

続いて雪坂が挨拶した。

「皆様、私は月曜日から内観部長と同じ場所に配属になります。長い間、お世話になりました。ありがとうございました」

2人の挨拶が済むと、安芸津が言った。

「内観君は、部長ではなく、担当者として転籍して貰うことになった。これまでもあまり仕事が無かったが、これからは、言われてからやるのではなく、自分で仕事を見つけるようにして欲しい。雪坂さんはこれまでの業務を担当しながら、新しい業務MIプロジェクトの英文関連の業務を担当して貰う。ちょっと負担が重くなる。2人とも11月1日付けでの転籍になる。よろしく頼む」

安芸津の皮肉を込めた言葉に、皆驚きの色を隠せなかった。賢と康子は既に荷物を全て運び出してしまっていたので、その日は只、PCで関係者とのメールのやりとりをし、作成途中の資料作りを継続した。一段落すると、既に支社内に説明を終えたプロモーション用のVS館の計画案を秘匿部分を削除して、プリンターで印刷し、取り扱いを注意するように言って亀田に渡した。それが済むと、部門サーバーのデータは過去のデータと一緒に全て支社の企画部門のサーバーに移してしまった。終業時間になると、PCのIDを削除し、パスワードを消去した。奥日が出て来て、送別会を6時から駅の近くの「道産子グルメ船」で行うと言った。送別会は、安芸津を除く全員が出席した。この日の送別会は賢に対するより雪坂の送別会の様相が強かった。アルコールが回ってくると、誰もがよく喋った。安芸津が居なかったので、一層開放感を感じているようだった。田野村が大声で言った。

「おい、内観、何か芸をやれよ」

それは、唐突な怒声だった。雪坂がキツとなって言い返した。

「田野村主任、内観部長に対して、呼び捨てとはどういうことですか？それに、その侮辱的な言葉は！」

「内観は、もう、平になったんだ。俺より下だ。年齢も俺より若い。呼

び捨てで、何が悪い？」

賢は言った。

「内観で構いませんよ。月曜日には役職が無くなりますから」

雪坂はいきり立った。

「ふざけないでください。配転がはっきりしたら、内観部長に対して急に態度を変えるなんて、礼儀というものがあるでしょう。それに部長が居ないからって大きな声をだして、田野村主任は、そんな肝っ玉の小さい男だったんですか？」

「あのな、雪坂、おまえ達が一緒の車で出勤と退社しているのを知らないとでも思っているのか？みんなだって知っているけど、黙っているんだ。おまえら、大体ふしだらなんだよ。いやらしい」

「私たちは、何もやましいことはしていません。只の友達なんです。私のことを、本当の友達として扱ってくださった方は内観部長を置いて他にいないんです。田野村主任だって、私にはかなり距離を置いているじゃないですか。一緒に出勤、退社してどうしていけないんですか？」

「あのな・・・」

「今日は、送別会なんだから、喧嘩しない方がいいよ」

今まで黙っていた稲城が言った。いきり立っていた田野村と雪坂は言葉を失った。賢が言った。

「今日のお礼として、皆さんに僕が手品をお見せしましょう」

賢の言葉で白けていた場が、また盛り上がってきた。田野村以外の全員が拍手をした。田野村は体裁悪そうにぐい呑みで酒を飲んでいる。亀田が一段と大きな拍手をした。賢は立ち上がった。

「いいですか、今日は僕が一度もやったことのないことをやってみます。上手くいったら、ご喝采・・・・・・では、皆さんの目の前にあるぐい呑みの中のお酒を飲み干してください。ビールを呑んでいる人も、手前の裏返してあるぐい呑みを表にしてください。いいですか？」

全員の前に空のぐい呑みが用意された。賢は瞑想状態に入った。意識を重畳する2つの場に分けた。一つは現在全員の居るこの宴会の場、もう一つは意識で創造できる幽界の場である。賢は幽界の場に全員のぐい呑



みを転写した。そして、その転写されたぐい呑みが酒で満たされるのをイメージした。ぐい呑みはゆっくりと酒で満たされていった。この宴会の場にあるぐい呑みはまだ空のままである。賢はそこで、重畳する二つの場を一つにすることを意志した。意識を強く作用させた。全員が自分のぐい呑みを凝視している。ぐい呑みの中に酒が漲ってきた。賢は、瞑想状態を解いた。全員が拍手をしている。賢はかなり疲れを感じて、ふっと息を吐いた。

「さあ、皆さん、呑んでみてください」

「凄い、お酒だ、間違いなくお酒だ」

亀田が叫んだ。皆、てんでに賢のパフォーマンスを称えた。康子はまだ拍手をしている。賢が言った。

「雪坂さん、呑んでみないの？」

「私、呑まなくても分かります。内観部長のされることに間違いはありませんから」

「内観部長、どうやったのですか？不思議です。僕はじっと見ていたんですけど、何も動いていないし、只ぐい呑みにお酒が満ちてきただけでした。本当に不思議です」

亀田が興奮している。賢が言った。

「もう一つ試してみます。今度は、水の入ったコップを手前に置いてください。コップの無い方は店の人に頼んでください。奥日さん、お願いします」

奥日が給仕に声を掛けて、全員の前にグラスに入った水を用意させた。今度は難しいことをしようと考えていた。水の分子構造を替えて、アルコールにしようと考えた。しかし、自分が酒の成分を詳しくは知らないことに気付いた。賢は別の方法を考え、瞑想状態に入った。賢は再び幽界に意識を移した。先ほどと同じように重畳する二つの場を設け、幽界に一升瓶の酒を顕現させた。そこの全員のグラスに入っている水を全部空にして、酒を注いでいった。1升で何とか全員分間に合った。そして、幽界のグラスと現実の場のグラスをスワップさせた。賢は瞑想を解くと言った。

「皆さんの目の前にあるグラスの水を一口飲んでみてください」  
全員グラスを手にして、一口飲んだ。全員がてんでに驚きの声を上げた。  
江梨が言った。

「内観部長、お酒になっています。どうやったんですか？」  
賢は微笑んで、言った。

「マジックですよ。種明かしはしませんよ」  
奥日が言った。

「内観部長は引川天功より凄いです。私たちが催眠術でも掛けられているのでなければ、こんな凄いマジックは誰にもできません。でも催眠術に掛かっているようでもなさそうだし……」

田野村が言った。

「おい、内観、そんな手品ばかりやってるから、格下げになったんじゃないか？そうだろう」

賢は黙っていた。

宴会が開くと、賢は駅に向かった。この日は梓が車を運転して帰った。賢が札幌駅の改札に入ろうとしたとき、雪坂が後から駆けて来た。

「賢さん、今日は、私のアパートに寄って行ってください。渡したいものがあるんです」

「あ、康子、後を附いて来たのか？」

2人は電車の席に並んで座った。

「この間貰ったお守り、ちゃんと身に付けているよ。ほら」

賢は襟口に手を差し込み、お守りを引き出して見せた。

「本当に身に付けていてくれたのですね。うれしい。それ、おそろいなんです。私も身に付けています。人前じゃ恥ずかしいから見せられないけど」

賢は康子に附いて江別駅で降りた。康子のアパートは駅から歩いて10分ほどの所にあった。康子は部屋の鍵を開け、賢が先に中に入るように言うと、自分が後で入って、ドアに鍵を掛けた。

「賢さん、上に上がらないで、このまま、この間のように、私を連れて、外を飛んで頂けませんか？」

「どこか、行きたいところがあるの？」

「う、うん、函館の夜景が見たいの。賢さんとふたりで、眺めたい」

「分かった」

賢は康子の部屋の入り口に立ったまま、康子の身体を引き寄せて、抱きしめた。それから瞑目し、瞑想状態になった。周囲の場を掌握して、自分の身体から重力の作用を取り除き、上空高く自分達が浮遊している状態を連想した。連想が完全に現実性を帯びてくると、賢と康子は札幌の上空高く、空中に留まっていた。外は異常なほど寒い。康子には慣れた寒さだったが、賢は思わず身震いした。しかし、意識は切らなかつた。賢は更に上昇することを意志した。身体が上空高く浮き上がると、眼下に見えていた札幌の明かりがだんだん小さくなってゆく。賢は南南西に方向を定めて、およそ100キロメートル先を意志した。2人は眼下に真っ暗な海、少し前方に山影の伺える上空に居た。そこから左右の二つの山を越えて夜空を滑空した。やがて小さな明かりがちらほら見え始めた。明かりは次第に星をちりばめたように広がっていった。寒空に広がる光の海は、康子を夢心地に誘っているようだった。賢はそこが函館の上空だと思った。

「港が見えるわ。外海は烏賊漁の漁船があると、明かりが明るくてとっても美しいのよ。私、一度来て、魅せられてしまったの。ほら、よく見えないけど、五稜郭はあの辺りよ」

抱きしめられている身体で、左手を伸ばし康子が言った。賢は意識が分散しないように、集中して、康子を抱いたまま、街の上を通り過ぎ前方の小高い山の上に降りることにした。康子が言った。

「展望台があります。でも、観光客も居るから、分からないように降りた方がいいです」

賢はアンテナの立っている建物の脇に静かに着地した。賢が康子を抱き締めていた手を緩めても、康子は暫くそのままの状態でした。賢も無理には離さなかつた。やがて康子が賢の背に廻していた手を緩めた。

「あの上が、展望台です。賢さん、私に附いて来てください」

賢の手を引くようにして、康子は階段を上ってゆく。展望台はあまり混

雑していなかった。函館の街の灯、港の灯火が美しくふたりの眼に映った。夜のとぼりが降りた外海には烏賊釣りの船影は無かった。それでも康子は暗闇の海を見詰めていた。遠くにいくつかの光を見つけ、康子は子供のようにはしゃいだ。

「賢さん、ほら、ほら、あそこの遠くに明るい白い光があるでしょう。あれが烏賊釣りの灯よ、あれはね、宇宙船からも見えるんだって」  
ふたりが康子の部屋に戻ったのは10時を回った頃だった。部屋に戻っても、康子は賢から放れなかった。何時まで待っても、しがみついて離れない康子に賢が言った。

「康子、もう、そろそろいいだろう」

康子は首を横に振る。賢は両手で康子の頭を掴み、唇に口づけをした。康子は漸く腕を緩めた。

なんとか康子を説得し、賢はやつとのことので家に帰ることができた。帰りの最終がなくなっていたので、仕方なく、家の玄関の前にテレポーションした。静かに家に入ると、リビングには、入浴を澄ませた梓がソファでテレビを見ていたが、賢の姿を見ると、直ぐにスイッチを切って、立ち上がった。

「お帰りなさい。送別会どうでしたか？」

「うん、楽しかったよ。マジックをやっちゃった」

「へえ、どんなマジック？」

「空のぐい呑みにお酒を満たすのと、グラスの水を酒に変えるマジックだよ。みんな喜んでいたよ」

「えっ？あなた、そんなことできるんですか？」

「なーに、そんなに難しくないよ。幽界でやって、現象会に移すだけだからね」

「そんなこと、誰もできませんよ。あなたぐらいしか」

「もうそろそろ、そういうことができる人が現れてくると思うよ。僕はその魁かも知れないけどね。君だって大分、透視ができるようになってきたじゃないか」

「でも、空のぐい呑みに自然にお酒が満ちてくる、これって、おとぎ話

の世界ですよ。夢の世界でしょう。ドリームタイムみたいなものかな。あなたと過ごした半年間が、僅か2時間でしたからね。あのときも、いろいろなものを食べたんだから、確かにそれを現実を持って来れるというのも、ありかなと思ったりします」

「僕は、初めてやってみただよ。前に会議の席で、パンを出したことがあるだろう、あのときより、やり易かったよ」

賢は康子を連れて函館まで行って来たことは口にしなかった。梓に不快感を抱かせないためだった。その日の夜は、ムクウからは物質化についての手法を指導して貰った。ムクウは意識の集中の他に、具体的なイメージに繋がるものがあつた方が物質化はし易いと説明した。小さいものは比較的容易に物質化できるが、形状や構造が複雑なものは、機能をよく認識しておく必要があると言つた。そして、できあがつたものは、必ずしも原型と同じ構造ではなく、機能面だけが模写されていると見なすべきだとの説明もあつた。しかし、創造の段階では、そのような概念的なことを、念頭に置くことは絶対にまずく、機能がそれを構成する物質によって顕現していると観ることだと言つた。そう言う意味で、パンや飲料、粉類などの食物は簡単に物質化できるが、精密機械は難しいと言つた。物質化は奇跡などではなく、この地球上では日常的に行われているとも言つた。種から芽が出て、その茎が伸び、葉を付けて大きくなって行くのは、全て物質化で、現代科学は自ら養分を吸収して、タンパク質が作用して、内部で化学反応が起きて細胞が出来てゆくと言つた。それは取つて付けた理由であつて、本当は光、水、土、空気を成分にして、空間に形を作っているのだと説明された。それを現代科学のスケールで見ると、化学反応や原子結合などで説明できるのだ、金属や岩の出来るプロセスも同じだと言つた。その後で、ムクウは賢に物質化の正確な手順を解いて聞かせた。これまでの、賢の行つていた物質化は意識の集中力による方法で、その方法でも可能だが、自分の意図したものを物質化するのは難しいとの説明があつた。それはこの3次元における創造のプロセスそのものだった。ムクウは物質化をそれほど重要視していなかつた。それより、次元の認識と多次元における自分自身の振る舞い方、

他の存在の制御方法がもっと重要だと言った。時代が変化するとき、その必要性が生まれてくると言った。この日は物質化の段階で指導は終わった。

翌日賢は支社の企画部に出社した。康子は既に席に着いていた。初めに賢が席に着き2、3分してから梓が部長席に着いた。碧瀬と須崎は始業1分前に挨拶もせず席に着いた。梓が全員を呼んだ。先ず梓が賢と康子を2人の男性に紹介した。続いて、2人の男性にそれぞれ自己紹介をさせた。

「自分は、碧瀬と申します。V S 館建設用地確保の為の業務を担当します。よろしくをお願いします」

「自分は、須崎と申します。V S 館の周辺のインフラなどの環境整備、電気・ガス・水道・ネットワークなどの敷設準備を担当します。よろしくお願いたします」

2人とも、ドスのきいた声で、簡単な自己紹介をした。2人は主任だった。賢と康子は2人の男性に鄭重に頭を下げた。2人の男性は頷くように軽く頭を下げた。それから少しして、梓が全員を小会議室に集め、業務分担の説明を行った。碧瀬と須崎は、表向きは個別の担当業務を持つが、実際は常に2人で協力して業務を推進すること、特に周辺住民、道庁、市役所などとの調整、土地買収交渉などを行い、賢は企画の立案、本社対応、支社とのコミュニケーションを担当すること、康子は文書関連業務で資料作成や、翻訳、契約書作成などの業務を担当することになった。会議が終わると、碧瀬と須崎は行き先掲示板に「外出直帰」と書いて出て行った。賢は康子と2人で梓に対しV S 館建設の企画案を説明した。それには投資から運用まで、詳細にわたって記載されていて、各項目のブレイクダウンも成されていた。詳細説明の資料を入れると100ページ以上の資料であった。梓は、賢の短期間での業務の成果に敬服した。その日の昼食は3人一緒に出掛けた。康子は遠慮がちで言葉少なだった。午後は支社の経理部、総務部との予算、人員等について協議を行い、今週中一項目ずつ詰めの確認を行うことになっていた。梓から言われ、この日から康子は直接自分のアパートに帰ることになった。康子

は終業後直ぐに退社した。梓は1時間ほど残業をし、賢の車に同乗して帰宅した。

3日間が経過した木曜日の朝、康子が出社しなかった。碧瀬と須崎がいつものように外出してしまった後、暫くして、賢のPCにベポライズ・メールが入った。開いた後、10秒で消えるメールだ。

「雪坂は預かっている。彼女の命を救いたいのなら、今すぐ、一人で彼女のアパートの部屋に來い。もし、誰かに知らせたら、彼女の命はない」賢の意識に衝撃が走った。梓は経理部長と打ち合わせ中で、席を外していた。賢は行き先掲示板に「外出」と書き込んで、直ぐに支社を出た。外に出ると賢は直ぐに康子のアパートを透視してみた。康子はベッドのポールに縛り付けられ、猿ぐつわを噛まされていた。しかし、部屋の中には他に誰も居ないようだった。賢はテレポテーションで康子の部屋に移動した。康子は震えていた。賢は猿ぐつわを外し、手を縛っている綱を解いた。

「康子、どうしたんだ？誰がやったんだ？」

「あぶない！」

康子の声で、賢は康子を抱きかかえて身を伏せた。

「パン、パン、パン」

銃声が轟いて、誰かが駆け出してゆく足音がした。賢は耳を澄ませた。3人ほどいるようだった。入り口のドアが開いている。そこから狙撃されたようだった。弾は康子の縛られていたベッドのポール際のクッションに1発、壁に2発当たっていた。

「あ・ありがとう・・・ござい・・・ます」

康子の声はまだ震えている。

「誰だったか分かるか？」

「いいえ、入社しようとして外に出たとき、いきなり目隠しされてしまいました」

「今まで、こんな目に遭ったことは？」

「いいえ、初めてです」

「僕を呼び出す罠だな。康子、今日から暫くは僕の家泊まれよ。今か

ら、着替えをまとめてバッグか何かに入れて・・・」

康子は急いでクローゼットからスーツケースを取り出し、その中に、衣類と下着類などを無造作に放り込んだ。賢は、リスクを避けるため、康子を伴って、テレポテーションすることにした。康子がスーツケースを抱えているのでかなりの集中力が必要だった。康子を抱きしめて、一気に自分の家のリビングに移動した。一旦康子のスーツケースをベッドのある客間に運ぶと、怯える康子をそこに残して、賢は支社の階段にテレポテーションした。階段は普段は誰も利用しない。賢は自分の家の周囲を透視してみた。人影も、不穏な意識のかけらも見当たらなかった。そっと階段から廊下に出る扉を開けてみたが、幸い、廊下に人影は無かった。事務所に戻ると、梓が賢を呼んだ。もう終業時間間近だった。梓が経理部長との協議の結果を賢に一通り説明し、2人は退社した。車の中で、賢は今日起きたことを説明した。梓には何も知らない振りをするように言った。家に着くと、康子がテレビを観ていた。

「おかえりなさい」

「あら、康子さん、どうしたの？」

梓は何も訊いていない素振りをした。

「はい、具合が悪くて、賢さんに休むってメールを入れて、アパートで寝ていたら、賢さんが来て、テレポテーションで、私をここに連れて来てくれました」

「症状はどんなの？それで、もう大丈夫なの？」

「はい、貧血のようです。原因は分からないのですが・・・薬も呑みましたから、もう大丈夫です」

「そうなの、それは大変だったわね」

「康子、何か変わったことは無かったか？」

「はい、電話が3度掛かってきました。4時頃1回と先ほど2回。でも、私は出ませんでした」

「うん、それでいいよ」

賢がソファに腰掛けると、梓が直ぐにキッチンに向かい夕食の支度を始めた。康子も立ち上がり、キッチンに行って手伝った。2人でチャー



ハン、酢豚とサラダを作った。2人が協力して作ったので料理は直ぐに出来上がった。ご飯の炊けたのを見て、二人が料理を食卓に並べようとしていると、電話が掛かってきた。賢が電話に出ると、数馬からだった。数馬はさっきも電話を掛けたと言った。試行プロジェクトが中止になったので、今後の進め方について相談したいと言った。東領製作所の本社は、この件ではもう相手にしてくれないとのことだった。賢は、自分と梓がいるので、相談に乗ると言った。数馬は金曜日の夕方札幌に来ると言った。千歳空港に賢が迎えに行くことになった。賢が電話を切ると、食卓には既に夕食の準備が調っていた。賢は2人の女性に向かい合って席に着いた。2人の女性の間には敵対的な雰囲気を感じたが、言葉上は和気藹々としている。3人は「いただきます」と言って、箸を手にした。「田辺部長、お2人でお過ごしの方に押し掛けてしまって、申し訳ありません」

「それは構わないわ」

「梓、康子には、暫くの間、この家から会社に通って貰おうと思うんだが・・・」

梓は、少し考えるような振りをして、応えた。

「雪坂さん、そんなに具合が悪いのですか？お医者さんは何ておっしゃっているの？」

「単なる貧血だと言っています。大したことはないのですが、賢さんが、是非そうするようにとおっしゃってくださるので・・・お言葉に甘えて、お世話に・・・」

「梓、そうした方がいいだろう、康子は一人住まいだから、心細いと思うんだ。ここなら、僕も梓も居るから、いざというときも安心だし」

「そうですね。それがいいわね」

梓の気持ちは穏やかでなかった。賢の口から、狙われているのは康子ではなく、賢なのだと言ったのに、何故康子をこの家に住ませる必要があるのだろうかと思った。しかし、そのことは口にできなかった。

賢は食事をしながら、どうして自分が狙われるのかを考えた。可能性としては、インドの売春組織かMIプロジェクトの競合、それとも人間関

係からか、それしか思い浮かばない。それにしても、直接自分を標的にしないで、どうしてわざわざ康子を介在させるのかも疑問だった。その点から見ると、インドの売春組織は可能性として薄い。残るはMIプロジェクト絡みか、個人的な恨みや、やっかみからくるものだ。可能性を一つずつ分析してみた。考えられるのは、自分と康子の関係を疑っての犯行・・・これは、複数の人間が逃亡してゆく足音がしたから、まずあり得ない。次は、自分と康子を一度に狙った犯行・・・その場合は、康子をここに置くのは康子を守るという意味では妥当だ。しかし、梓まで巻き添えを食ってしまう危険性は残る。もしそうだとすると、何故わざわざ康子を縛り上げて、自分を呼び出したのか理由が見えない。もう一つは、康子を罠にした犯行・・・康子は相手が誰だか分からなかったと言った。この線が一番可能性が高いと考えた。康子と自分との仲を疑っての犯行かも知れない。この場合は康子をここに住ませるのが最も安全である。狙撃を受けた直後のインスピレーションによる判断が一番妥当性を持っているように思えた。

「あなた、お食べにならないのですか？」

梓が言った。

「あ、いや、済まない。少し、考え事をしていて・・・」

食事が済むと、賢は家の周囲に意識を張り巡らせてみたが、不穏な雰囲気は無かった。賢は自分が先に入浴し、一旦居間に戻った。梓が続いて浴室に向かった。賢は浴室の周辺に意識を巡らせてみた。特に異常は感じない。暫くして、康子が言った。

「賢さん、私が狙われているということはないかしら。怖いわ。賢さんがテレポーションで行ってしまった後、怖くて怖くて、じっとしてられませんでした。だから、音を絞って、テレビを観ていました。私、お風呂、怖くて入れません。でも、犯人に触られたから、からだを流したいし・・・」

「いいよ、この間のように、僕が外で見張っていてあげるよ」

「ありがとうございます。でも、窓から襲われることはないでしょうか？」

「分かった。君が入っている間、僕が外を透視してあげよう。危険だと感じたら、知らせるから、その時は直ぐに出て来ればいいよ」

「恥ずかしいけど、そうします」

賢は家の周囲を透視してみた。人影も不穏な雰囲気も全く感じなかった。賢が康子の入浴中、洗面所の前で待っている姿を見て、梓は心穏やかでなかった。どうして、そこまでするのかと思った。何の問題もなく、康子は浴室から出て来た。それから暫くの間、3人はリビングで時間を過ごした。梓と康子はテレビでニュースを見た。賢は、瞑想をした。1時間ほどして、3人は寝室に向かった。康子は賢に近づき、小声で言った。

「私、怖くて、一人では眠れません。どうしたらいいでしょうか？」

「僕は、海の老人の指導があるから、一緒には寝れないよ。だけど、一晩中、君の近くに居てあげるよ。この日、賢は康子を和室の客間で休ませることにした。賢も同じ部屋に布団を敷いて寝ることにした。今度ばかりは梓も黙っていなかった。梓は、自分が康子と一緒に休むと言い出した。康子は賢に守っていて欲しかったが、上司の提案に納得せざるを得なかった。

賢は一人になると、瞑想状態に入った。直ぐにムクウから通信があった。心の所在についての説明だった。ムクウは言った。

「心は人間の身体のあらゆる部分に偏在している。細胞の一つ一つが心を持っている。そしてその心は、一人の人間の体内に、一つの意識として働く。その意識をコントロールできるセンターがアジナ・チャクラで、道教では上丹田と呼ばれるところだ。眉の中間の少し上で、おでこの1センチほど内側の所にある第3の目と呼ばれるところだ。お前は既にそこを開くことができるようになっているな。第3の目はとりもなおさず、自己の本体に通じる入り口だ。ここが完全に機能するようになったとき、この部分に意識を集中すれば、超能力が顕現する。別次元への通路だからだ。このことは、もうよく分かっているな。今日はもっと、肉体的なことを話す。この上丹田は生きている人間の心をコントロールできるセンターの役割をしている。もっとも、これは一つの方便に過ぎないのだが。本来心は全ての細胞に宿っていて、その偏在した心は、それぞれが

意識を持って働くが、それらの細胞の心は集合体として、一つの機関として心を作り出す。例えば臓器や筋肉などがその一例だ。その中で思考に直接リンクできるのは、5臓と脳が引き起こす心だ。心を情念として捉えると、「7情」に分けられる。「喜怒哀楽」という言葉があるだろう、人間の感情を表す言葉だ。「喜」は心臓から発して、「気」を緩める。「怒」は肝臓から発して、「気」を上昇させる。「哀」は「憂」と「悲」に分けられ、「憂」は肺から発して、「気」を縮める。「悲」も「憂」と同じ類だが、「憂」より強く、肺から発して、「気」を消す。「楽」は喜びから生ずるので、喜びと同じと考えてよい。次に他の4つの臓器に通じる「思」だが、「思」は脾臓から発して、「気」を固める。脾臓が弱くなると、「気」の流れが滞ってしまう。脾臓の「思」は思考ではなく、思惟だ。思念する心だ。脾臓は5臓全体をコントロールする。現代の西洋科学では、脾臓を重要視していない。だから、消化器異常や内臓疾患の手術を受けると、医師は直ぐに脾臓も切除してしまう。確かにこれを取り除いても、人間は動物としてなら生きることができる。しかし、自分の思いで、様々なことを行おうとすると、それが難しくなる。人間が人間としての高い意識レベルに達するためには、この臓器が絶対必要なのだ。「恐」は腎臓から発して、「気」を下降させる。「驚」も腎臓から発するが、突然の衝撃故に「気」を乱す。腎臓は母親から受け継いだ先天の精を蔵する臓器だ。生後は食物などから得られた後天の精を取り入れて、生きるためのエネルギーを蓄える。人間の寿命は腎臓によってもっとも大きな影響を受ける。腎の気が不足すると、身体の全てが衰えてくる。五臓の中では、特に感情の影響を受け易いのは心臓と肝臓だ。それは自分の体験で分かるだろう。大きな喜び、大きな怒り、恐怖、心配事があると心臓がドキドキする。それと分かる変化は直ぐに心臓に現れる。それと同時に、過度の感情の変化は肝臓に影響を与えて、その結果、循環器系に変化が現れる。肝臓が弱ると、必ず乱暴になる。近頃若者の間でよく言われている「キレる」状態は、肝臓の働きが悪くなっているためだ。食事の影響もあるが、環境の変化の影響も大きい。こんな説明をすると、5臓は人間の負の感情にだけ反応しているように思うかも知

れないが、それはあくまで、感情としての情の部分で、5臓から発する感情の変化が起きた場合の「気」の流れへの影響だ。だから感情の変動は押さえるべきことなのだ。それが達成できると平常心が保たれ、5臓は正常な機能を達成し、「気」の正常な運行が達成できる。そして、あらゆる病変は消えてしまう。更に向上すると漏尽通力にも通じて来るのだ。外側から気を流す外気は意図的に行うと、自分自身のエネルギーを消耗する。おまえが、以前、麻子に対して行ったエネルギーの供与は、おまえ自身から出た「気」を含んでいたが、「気」は宇宙に遍満しているプラナーとして自然に流すのが理想的だ。最後に脳だが、脳は「念」を司る。念は思考を産む。これらの5臓と脳も宇宙の法則に則って働いている。その宇宙の法則に完全に合致するとき、おまえの考えている根源の自分自身が顕現し、本来の宇宙の姿が現れてくる。その時は、もはや何かを成そうとする意識は無くなっていて、あるがごとくある状態になる。そのときの心の状態は全体の心であり、個としての特質は無くなっていて、歓喜に満ちている。今夜はこのことを自分自身で体現してみなさい。そうすることで、おまえがこれまで、直感的に行ってきたことが、秩序立てて実現できるようになる」

この日のムクウの教えは、賢が既に理解している部分が多かったが、このように整理して話して貰うと、生体としての自分自身とその生体から生じる心の働きがよく理解できた。問題は意識だったが、意識については説明がなかった。賢は意識の働きが最も重要だと考えている。意識が生体にどのように結びついているのか、それを知りたかった。賢は質問した。

「ムクウさん、僕は意識の働きで、真の自分自身に到達できると考えています。意識は上丹田を通して自己の本体に結びついているのでしょうか？意識はどこから生まれてくるのでしょうか？」

「今日はまだ、その部分には言及していないが、時空の構造を考えれば分かるだろう。意識は別の次元空間に属している。それは細胞のある3次元空間と重畳している。昨日話したように、意識を肉体と結びつけているのが愛だ。愛の意味は分かるね。存在を存在たらしめている力が愛

だ。細胞は愛の力で存在することを許されている。意識と肉体の接続点がDNAでその情報が、RNAという複製を作る愛の機能が作用として働いて、バランスよく細胞を増殖させてゆく。3次元的にはDNAは光の情報によって作用するように見える。まあ、今日はこの程度にしておこう。こういう構造も全て、本体から映し出すときに創られたものだ」  
「ありがとうございました」

賢は一旦瞑想状態を解いた。暫く意識を安定させ、呼吸を整えてから、家の周囲に意識を働かせてみた。特に異常は感じられない。暫く、寛いでいると、原からの呼び掛けを感じた。賢は直ぐに携帯で原に電話した。  
「賢さん、実は物質転送機のことですが、最初の試作を何台造ったらいいか相談したくて・・・」

「そうですね。僕の考えでは、10台くらいはあるといいと思うんですけどね。これは直感ですけど、実際のプロモーションはテレビでコマーシャルを打てば、1, 2台でいいでしょうけど、多分直ぐに大きな引き合いが来ると思うんです。その時、そのくらいの数はあった方がいいと思うんです」

「僕の考えも賢さんと大体同じです。ただ、これを試作するのに1台1千万くらい掛かるんです。10台だと、1億でしょう。そんなに投資してもいいんでしょうかね？」

「全然問題ないでしょう。その10倍掛かっても、OKですよ」

「分かりました」

「ところで、愛子はどうしていますか？」

「いま、ここに居ますよ。ちょっと代わりますね」

「賢パパ、元気？最初の日からずっと連絡無いから、心配してたよ」

「ごめん、ごめん、元気にやっているよ。そっちはどうだ？」

「私は大丈夫。原さんが居るから、心強いよ」

「愛子、今度はいつ休みになるんだ？」

「冬休みね。12月26日から10日間だよ。その時、賢パパの所に行ってもいい？」

「その方がいいか？それとも、僕がそっちに帰ろうか？」

「私、北海道に行ってみたい」

「分かった。それまで、勉強がんばれよ」

「勉強は大丈夫よ。原さんと一緒に行くね」

賢はその後、原と、試作の日程などを話し合った。電話を切ると、賢はこの日の省察を行い、床に着いた。眠りに落ちる寸前に、亜希子からの通信が来た。

アジスアベバ

「あなた、今、アジスアベバに居ます。あなたは何をなさっておいでですか？わたくし、明日から、難民の村に出掛けます。今日は、一人で居て、時間があるので、あなたに連絡してみました。ねえ、あなた、わたくしの居るホテルにテレポテーションして来てくださいませんか？わたくしは、あなたの居る場所が分からないので、そちらに行くことは難しいのです」

賢は、眠気を振るい落として、返事をした。

「亜希子、その場所をはっきり特定できるか？できるなら、テレポテーションやってみるよ」

「わたくし、調べてあります。アジスアベバの中心の位置は北緯9度1分48秒、東経38度44分24秒で、電話局のあるあたりです。ホテルはその近くにあります」

「その位置が分かれば、後は、亜希子の意識を追って、テレポテーションできると思うよ。亜希子は、ずっと僕に意識を向けていてくれよな」  
賢はそう言うと、直ぐにズボンとシャツに着替えて、瞑想状態に入った。東部アフリカの赤道付近、アジスアベバの中心を意識し、その中にいる亜希子の元に移動する意志を働かせた。3分ほどして、賢は亜希子の前に現れた。亜希子は喜んだ。賢の姿がはっきりして、賢の意識が正常に戻ったのを見届けると、いきなり駆け寄ってきて、賢の胸に飛び込んだ。  
「あなた、お逢いしたかったです。あなた、強く抱きしめてください」  
「亜希子、元気だったか？」

ふたりは強く抱き合ったまま、10分ほど動かなかった。そこは亜希子の宿泊しているホテルの部屋で、ベッドはシングル、部屋の大きさもそれほど広くはない。

「あなた、お仕事の方はいかがですか？順調にいらいますか？」

「いや、なかなか思うようにいかないよ。試行計画が中止になってしまって、今北海道でVS館・・・ほらVEASみたいなバーチャルシステム館だけ・・・その第1号を建設する為の準備に北海道に転勤になったんだ」

「それは、大変ですね。ご苦労様です。皆様は、お元気ですか？」

「うん、みんな元気にやっているよ。亜希子、原さんが、とうとう、物質転送機を完成させたんだ。もうじきそっちの仕事が忙しくなる。そうしたら、僕も今の仕事を続けられるかどうか分からない。少し、方向性が変わってくるかも知れないな」

「あなた、もし、会社をお辞めになるのであれば、わたくしたちと一緒に生きてくさいませんか？人を助けるために、アフリカに来て・・・」

「亜希子、ぼくは、どうやら次の世界に向けて、自分がプロトタイプにならなければならない定めのようなんだ。だから、直ぐには君たちと一緒に生きることはできないと思うよ。何時だって一緒じゃないか。今だって、こうして逢っているし、時々テレパシーで話もしているし」

「でも、やはり、実体が無いと物足りないです。こうしてあなたに抱き締めていただくと、もう、生きていてよかったって思うんです。わたくし今が一番幸せです」

「うん、僕もそうだよ。亜希子、君の活動はどうなんだ？この間も言ったように、エチオピアは僻地に行くと病気の感染なんかに対して、かなり慎重にしないと危険だと聞いたけど・・・」

「はい、そのことは重々承知しています。いろいろな病気が発生しています。一番危険性の高いのはやはり、ハマダラ蚊を媒体とした伝染病です。ですから、可能な限りのワクチンを接種してきていますし、蛇の解毒剤も用意してあります」

「そうか、それだけ注意していれば大丈夫かな？でもこういう用心はい



くらしでも十分ということはないから、水や食べ物は、街で手に入れた物を食べたりして、できるだけ注意した方がいいよ。だからと云って、あまりそのことに意識を持ってゆくと、逆にそれが現象化してしまうから、注意しろよ」

「はい、そのことも、よく分かっています」

ふたりは1時間ほど一緒に過ごした。亜希子は賢にエチオピアでの活動について、詳しく説明した。亜希子は死に直面している人たちを救済しようとしていた。そして、救済が叶わずに死んでしまった人達の魂も、導こうとしていた。しかし、賢にはそれがとてつもなく難しいことのように感じられた。

「病気で亡くなった人の魂は、導くのがかなり難しいと思うよ。その病気から立ち直らせることを第1にやらなければならないから、病気を治療するのと同じようなものだろう」

「ええ、そのことは、わたくし、キガリのジェノサイド・メモリアルでも経験していますから、何とかなると思います」

「どうして、アフリカ中東部の人々はこれほどまでに苦しみを体験しなくてはならないのだろう？」

「由宇お姉様も頑張っています。わたくしも頑張ります。あなたがいつか、100匹目の猿の話をされたことがありますわね。あれと同じようなことが、必ず起きると信じています」

「うん、それは大切なことだよ」

千歳

賢がテレポーションで自宅に戻ったのは2時近くだった。賢は直ぐにベッドに潜り込んだ。その夜は何事も起きなかった。

翌日の朝食は、康子が作った。梓と相談したようだった。3人はそれぞれに警戒の意識を全開にしていたが、金曜日は何も起きなかった。賢は数馬を迎えに行くために、4時に退社した。外は雨が降っていた。雨脚はそれほど激しくなかったが、札幌江別通を走り、札幌南インターで道

中央自動車道に乗った。雨の高速道路は走りにくかった。金曜日の夕方だったので渋滞を考えて早めに出て来たのだが、幸い道路はそれほど混んでいなかった。久しぶりに逢える数馬を思うと、うれしさが込み上げてきた。千歳インターを降り、料金所を抜けると、雨に煙る前方の空に離陸した機影が見えた。もう空港に着いていた。賢は空港の駐車場に車を止めると、到着ロビーの出口で数馬を待つことにした。外は雨で霞み、ガラス窓から見えるアプローチ道路もはっきり見えなくなってきていた。雨は次第に強くなり、エントランスから入って来る人々も傘を手にし、足元を濡らしている。数馬の乗っているはずのフライトは30分ほど遅れる様だ。賢は待合室のある場所を探したが、団体の待合室しかなかった。仕方なく、有料の接遇室に入った。中には人影は無かった。賢はそこでしばし瞑想をすることにした。瞑目すると、混沌とした場がそこにはあった。誰かが自分を呼んでいるのが判る。それは声のようでも、叫びのようでもあった。賢は意識をその叫びにフォーカスしてみた。周囲は次第に暗い雰囲気になってきた。遠くに森が見える。叫び声はその森の中から聞こえてきているようだ。賢はその森まで歩いて行った。賢は自分の周囲が明るい光で包まれていることに気付いていた。薄暗い森の中に丁度スポットライトが当たっているような感じだ。森を進んで行くと、先の方に大勢の男女に囲まれて一人の若い男性がその中心で、合掌をして正座している。周りを囲んでいる人々の中の一人の女性が若者に対して言った。

「もっと右よ、右、何度言ったら分かるの？」

若者は身体を右に動かした。今度は一人の男性が言った。

「もっと左だ、もう少し左だ」

その声で、若者は今度はほんの少し左に動いた。続いてまた別の女性が言った。

「もう少し姿勢を正して、そうそう、もう少し」

若者は姿勢を正した。まだそのほかの男女が首を傾げている。若者は姿勢を正し、身体を右に、左に少しずつ動かして、正座のポーズを修正している。賢は男女のグループに近づいた。辺り一帯が賢の周囲を覆って

いる明るい光で照らし出された。先ほどから何かブツブツ言っていた男性が賢の方を振り向いたとき、賢はその男性に訊いた。

「何をしていますか？」

「それは決まっているじゃないか。悟りを得る為の修行だよ」

「どうして身体を右・左に動かしているのですか？」

「おまえは誰だ。ここは悟りを得るための修行をする場だ。悟りを得るには、最適な場所で、最適な姿勢で行わなくてはならない。この男はもう、1年以上修行を続けている。大分よくなったが、まだ先は遠いな」

「姿勢を正すということは悟りのためにはそれほど重要なのですか？」

「それはそうに決まっている。正しい姿勢で、無念無想で正しい仏を祈らなくては悟りどころか、地獄に堕ちてしまうんだ。一番大切なことだ」

「あなたがたは、既に悟っておられるのですか？」

「悟っているとも、悟っていないともいえる。頭の中に仏が見えたり、見えなかったりするが、どうも、ここが天国であるしては、あまり花が咲いてないしな……」

「そうですね、天国にしては、少し暗いように思いますね」

「そう言われてみれば、そうだな。暗いようでも、それほどでもないようでもあるな……ところでおまえは一体誰だ？」

「叫び声が聞こえたので、僕は皆さんが何をしているのかと思って、来てみたのです」

「ああ、あの声か？あれは康夫が上げた声だよ。火の上を歩く修行をしていて耐えられなかったんだ。康夫はまだまだな」

康夫という名前に聞き覚えがあった。だが、賢はそれが誰か思い出せなかった。千歳空港で失踪した男性は確か、浮石と言う苗字だった。彼が康夫なのかどうかははっきりしなかった。

「おまえはどこから来た？」

「普通の世界から来ました」

「ふざけるんじゃない。普通の世界なんていう場所はない。札幌とか、釧路とかあるだろう」

「そういう意味ですか？それなら、札幌の近くの由仁に住んでいます」

「由仁か、あそこは天国より地獄に近いな。最近、近くにVEASとかいう偽物を見せる劇場が出来ただろう、人をだましていてるそうじゃないか。それで、仏がご立腹になり、あの辺りの地域は地獄に繋がることになったらしい。早くあそこから引っ越した方がいい」

「そうですか。ところで、ここはどこですか？」

「まだそんなことを言っているのか。ちょっと待て」

そう言うと、男は側にいる、女性に向かって訊いた。彼女は先ほどから賢と男の会話を聞いていた。

「あんた、ここがどこか知っているか？」

「私は知りませんよ……一体どこなんでしょうね。ちょっとあんた、ここがどこか知っている？」

女性はその隣に居る女性に声を掛けた。

「ここ？ さあ、知らないね。どこなのかしらね」

次々に質問されていったが、とうとう、誰もここがどこか分からなかった。男は言った。

「われわれは札幌かどこかの上にある、天国の森の中に居るんだろう。うん、それが正解のようだな。それより、おまえは誰なんだ。おまえの周りを変な色で光っている。おれは、さっきから眩しくて仕方ない」

「そうですか。ぼくは内観賢と申します」

「ウチミ？ 聞かない名前だな？ 新入りか？ 新入りなら、おまえがどれだけのレベルか調べるから、ちょっとこっちに来い」

賢は男に袖を捕まれ、その場から連れられて、髭を生やした5人の老翁達の居る場所にやって来た。老翁達は何も敷かずに地上で座禅を組んでいる。皆瞑目していた。その老翁達の横に木で組んだ高さ1メートルほどの檣があった。男は老翁達に向かって、頭を下げた。目を瞑っていた老翁達が一斉に目を開いて男を見た。

「支部長様方、新入りを連れて参りました。この男のレベルを確認してください」

一番年長に見える白髪、白髭の老翁が言った。

「そうか、分かった。その男の名前は何と云う？」

「ウチミと云うようです」

「ウチミ？名前の響きが悪いな、怪我でもしているような名前だ。まあそれはいい。まず、その木の台の上に立ってみなさい」

賢は木の台の上に上がった。

「おまえは、この時点で、まず減点だ。履き物を脱がずに上がるのは、非人間的な行為だ・・・よし、それでいい。ではそこに座ってみなさい」

賢は正座をして座った。それと同時にこの場がどういう場かを調べてみた。意識を全開にして、周囲を観察した。あちこちに先ほどのような人々の集合している場所があるようで、そこには、想念の渦が出来上がっている。一人か二人を囲んで、修行と云われる行為を行っているようだった。老翁の居る場所はここだけのようだった。この森の様な空間の中央に一つの建物があるのが分かった。そこには人の意識は無かった。中に何かが置かれている。どうやら仏像のようであった。賢はこの空間が幽界の一部らしいと思った。幽界に出来た同じ想念を持った者達の集まっている場所のようだった。幽界であれば意識で何でも創り出すことが可能なはずだった。賢が座っていると老翁達が立ち上がり、先ほどとは違う老翁が言った。

「おまえの行ってきた修行の結果を見せてみなさい。それによって、これからどんな修行をすればいいかをおまえに伝える」

賢は、ここに居る者達の求めているものが何であるのか考えた。そして、それを実現して見せようと思った。先ほどの建物の中に仏像が安置されていることを思い、空間に金色に輝く仏像を出現させることにした。賢は応えた。

「分かりました。私は、仏様を虚空に顕してご覧に入れます」

老翁達は驚いて、顔を見合わせた。賢は瞑目した。そして想念で5メートルほど離れた中空に高さ2メートルほどの縁に蓮華の彫り物を施した金色の台座を出現させ、その上に3メートルほどの高さの金色に輝く仏像を鎮座させる形で出現させた。賢は静かに瞑目を解いた。長老達が仏像に対して合掌をし、頭を深く下げている。先ほど賢を導いてきた男は地に平伏していた。賢は言った。

「この仏は僕の想念で出現させたものです。これでよろしいですか？」  
長老の一人が言った。

「大変申し訳ないことを致しました。失礼の数々をお許してください。あなた様の悟りの深さが分かりました」

賢は想念で、仏像と台座を消した。

「この世界は、自分の意識で何でもできる世界なのです。あなた方も心を純粹にして、意識を集中すれば自分の意図したことを実現できます。僕が特別なのではないんです」

長老の一人が言った。

「どうか、あなた様が習得されたお力をお見せいただけませんか？」

賢は了解して、空中浮揚、物質化による空間からのパンの取り出し、遠隔透視などをやって見せた。この空間が幽界であるので、意識の集中をそれほど強くする必要はなく、簡単に行った。老翁達は賢を鄭重に扱うようになった。賢は言った。

「あなた方のここでの生活は仮のものです。本来のあなた方は別の所にあります。その本来の自分自身に立ち返ることで、あなた方は「悟った」と謂われる状態になることができます。まず、大切なことは、一切の執着を絶つこと、心を純粹にすること、自分自身を捨てること、すなわち無我になること、そして、静かに内側を見つめることです。それだけでいいのです。何も求めないこと、そうすることで、全てを手に入れることができるのです。いろいろな修法がありますが、それは全て今言った状態に至るための方便なのです。もし、これからも修行をお続けになるのでしたら、是非そのことを念頭に入れてやってみたらどうかと思います。一つ質問があるのですが、先ほど僕が拝見していた康夫という男性はどのような経路でこちらに来たのですか？」

老翁の一人が言った。

「あの男は、記憶喪失のような状態で森に迷い込んで来ました。どうやら、靈界に興味があるようで、いろいろな修行を行っていたと言っていました。それで、我々が悟りに至る道を指導していたのです。あなた様

のお教えいただいた道とは異なりますが、我々はあれが正しい道と信じてやってきております。あのやり方に何か問題がありますか？」

「僕の知る限りでは、あのやり方では、悟りを得るまでに何千年、何万年と時間が掛かると思っています。もっと近道があります。それはさっき言った、心の改革です。まず、常に意識的であること。そして、あらゆる存在に対して、愛の想念を持つこと、それから、あらゆる執着を絶つこと、さらに、自分自身を空しくする。すなわち、自分が居ないと感じるまで自己を放棄してゆくことです。それを修行したらいいと思います。規則を作り、それを守ろうとすることは、執着と固定化に繋がり、悟りへの道を遠ざけます。・・・それで、先ほどの康夫さんのようにこの森に彷徨い込んで来た人は何人居るのですか？」

「ああいう状態で、夢遊病者のようにして来たのは彼と、もう一人、女性がいますだけです」

「お願いがあります。その二人を僕に預けてくれませんか？ 悟れるように修行させてみたいのです」

長老の一人が言った。

「それは構いませんが、我々にもあなた様の悟りへの道をご指導いただけないでしょうか？」

「分かりました。でも、僕は現在、別の世界で生きています。ですから、その世界での修行を終えたら、必ずあなた方の所に伺います」

老翁達は喜んだ。そして、先ほどの男に言いつけ、ここに迷い込んだ康夫と女性を連れて来させた。賢は老翁達に別れを告げ、康夫と女性を連れて森を出た。ふたりは何事が起きたのか分からないらしく、恐怖心に駆られていた。2人とも21、2歳の年齢で、康夫は面長な顔をした大人しい感じの男性だった。背は170センチ前後、女性は細面のあまり目立たない、影を感じる様な印象を与える、150センチ前後の若者だった。賢が静かに言った。

「あなた方は、どこからここに来たのですか？」

女性はまだ、下を向いている。不安そうな顔を賢の方に向けて康夫が応えた。

「僕は、仲間と旅行に出ようとしていて、千歳空港で飛行機のチェックインを待っているとき、意識がなくなってしまったのです。どうして、ここに来たのかも分かりません。ただ、自分の住んでいる世界には、目に見える世界だけでなく、目に見えない世界があつて、それが重なって存在していると思っていました。そして、その世界を知りたいといつも思っていたのですが、まさか、その目に見えない世界が、こんな世界だったとは、まだ理解できないのです」

女性は黙っている。賢が女性に向かってもう一度訊いた。

「あなたは？どこから来たのですか？」

女性はもじもじしながら、ぽつり、ぽつりと話し始めた。

「私は、韓国人です。私は釜山で港の乙仲の事務を担当していました。ある日、コンテナの確認に港のコンテナ置き場に行ったのです。その時、クレーンが荷物を引き上げて、私の上を通過しました。そして、クレーンが回転したときコンテナがクレーンから外れてわたしの上に落ちて来ました。気が付いたら私はここに来ていました。ここで、私は周りに居る人達がいろいろな国の人たちだということを知りました。どうしても分からないのは、言葉がどの人にも通じてしまうことなのです。私は、外国語は片言で英語を話す程度しかできませんでしたから、どうしても分かりません。それなのにここに来てからは啞え啞え英語を話している様な感じはなくて、母国語と同じように話せるのです」

賢はふたりに微笑み掛けて言った。

「君たちの名前は何というの？」

「僕は浮石康夫です」

「私はキム・ヨンエ（金英愛）ともうします」

「浮石さんは、自分の家に戻っても問題ありませんか？」

「はい、僕は大学生ですから、千葉の両親は喜ぶと思います」

「私も、両親は釜山に住んでいて、私は同居していましたから、いつ帰っても大丈夫です。あのことがあつてから、どの位の月日が経っているのでしょうか？」

賢はこの日の日付を教えた。ふたりは自分の記憶を辿り、自分たちが1



年以上ここに居たことを知った。昼間はあの森で修行をし、夜は全員が寝泊まりしている建物に移動するという生活をしていたと言った。食事はいつも森の中央にある建物に全員が集まって、与えられたものを食べていたと言った。不思議なことは、彼らには入浴や、着替えをした記憶がないことだった。自分たちがどういう状態になっているのかも分からずにいた。触れるものには実体感があって、ここに来る前の環境とあまり変わっていなかったと言った。賢はキム・ヨンエが地上で死んでいるのか、それとも事故の起きる瞬間に失踪状態になったのかを知りたかった。ふたりに住所を聞いた。浮石の両親の住所は直ぐに分かったが、キム・ヨンエの住所は位置を想定することができなかった。賢はキム・ヨンエを地上に戻しても大丈夫かどうかを考えた。もし、地上で死んでいれば、地上に戻すことは、彼女自身の魂にまずい結果を招くことは明白だったし、霊的な成長の妨げになることも確かだった。賢は生命線の銀線を探ってみることにした。次元を切り替えてゆくと、ある次元で、幸いふたりの胸の中央部にある経穴、壇中部分から銀線が出ているのが確認できた。賢は、多分ふたりとも生存状態で失踪しているのだと思った。賢は、ふたりをとりあえず、空港の接遇室の前に連れ戻すことにした。賢はふたりに言った。

「今から、千歳空港の出発ロビーに戻りますから、絶対手を離さないでください。一旦戻ってから、後のことは考えましょう。いいですね。僕と一緒に居ると思ってくださいね。意識を他に移さないようにね」  
ふたりは何が何だか分からないようだったが、従順に賢の指示に従った。賢はふたりの手を握ると、ふたりの身体を自分に引き寄せて、抱きかかえるようにした。それから瞑目し、認識する場を最大限に広げ、意識を眉間に集中させて、空港の接遇室の外の扉の前に、自分が居ることを想念した。3人はロビーに姿を現わした。周りには人影が無かった。3人に不自然さはなく、あたかも以前からそこに居たようである。3人は暫くぼーっとしていた。賢が初めに意識を現実に戻した。それから、ふたりの視線が定まったのを確認してから言った。

「さあ、元の世界に戻って来ましたよ。できるだけ早く自分をこの世界

に定着させましょう。唾液（つば）を口の中一杯に貯めて、それを臍下の丹田に向けて飲み込んでください」

キム・ヨンエはキョトンとしている。賢ははっとした。キム・ヨンエは日本語が理解できなくなっていた。賢は英語で言ってみた。

「Fill your mouth with sputum, and swallow it toward the spiritual center below navel.」（唾液を口に貯めて、それを臍下の霊的センターに向けて呑み込んでください）

キム・ヨンエはまだよく分からないようだった。賢は一旦口を開けて指さし、直ぐに口を閉じて、唾を飲み込むジェスチャーをした。キム・ヨンエは漸く理解したようで、賢の真似をして唾を飲み込んだ。賢は時計を確認してみた。時間は接遇室の中で瞑想に入ってから10分ほどしか経過していなかった。賢はドアを開けると、ふたりを連れて何事もなかったように接遇室に入った。女性の係員がやって来た。賢は元の席に着いた。まだコーヒーが残されている。賢は2人分の使用料を支払い、ふたりに飲み物は何が好きか訊いた。ふたりともオレンジジュースと応えた。賢は席を立て、セルフサービス・コーナーから直ぐにオレンジジュースを持って来て、それを手渡ししながら、飲み干すようにふたりに告げた。ふたりはまるでロボットの様に、従順に賢の指示に従った。賢がお変わりのジュースを持って来るとふたりはまたそれを飲もうとした。賢は笑って言った。

「もう大丈夫、あとは、普通のあなたに戻ってください」

「Now, you have come back to the real world. It's not necessary to follow me anymore.」

賢は分かりやすいように、敢えて real という言葉を使い、現実世界を表現した。ふたりはにっこり笑った。賢が言った。

「ここは、千歳空港の待合室です。後、1時間くらいすると僕の友達がこの空港に来るんです。その間、少しお話ししましょう」

「This is a waiting room in Sapporo airport. My friend will arrive here one hour later. Shall we talk together for a while.」

賢は初めに日本語、そして、それを簡略的に英語に訳して話した。先ず

ふたりの不安を取り除くために、自己紹介をし、自分が住んでいる場所と、勤務している会社について簡単に説明した。ふたりは安心したようだった。賢は先ず、浮石に失踪したときの状態について聞いた。浮石は説明した。

「僕は仲間と一緒にツアーに行くために、この空港の出発ロビーでフライトのチェックインを待っていました。長い列が出来ていて、待っている間、みんな旅行の計画などの話に夢中になっていました。僕は先ほど言ったように、霊的な世界に興味がありましたので、一度霊界を覗いてみたいと思っていて、その時も、そのことを考えていたのを覚えています。気が付くと、みんなの姿がありません、何か真っ白な光の中に居るような感覚がして、自分がどこに居るのか分からなくなりました。その状態が続いたので、少し不安になりました。そうしたら、目の前に一本の道が見えてきたので、その道を歩きながら他に目に見えるものが無いかと探していたら、例の森が見えたのです。それから後は、さっきお聞きになったとおりです。あの白い光は一体何なんでしょう？」

「多分、別の次元に入ってしまったんだろうね。そう、経過は大体分かった」

「Miss Kim, were you interested in spiritual matter before you move into that strange world?」（キムさん、あなたはあの奇妙な世界に入り込む前は霊的な事に興味がありましたか？）

「No, I was not.」（いいえ）

「Have you ever met with any strange phenomena?」（これまでに変わった現象に遭遇したことがありますか？）

「Strange what?」（奇妙な何ですか？）

「Ok, in another word, have you ever had any strange experience?」（そう、言葉を替えれば、あなたは何か奇妙な経験をしたことがありますか？）

「Yes, I saw UFO several times. And, I saw the person alive in the air who has already dead.」（はい、私はUFOを数回みえています。そして、既に亡くなってしまった人が空中で生きているのを見ました）

「Thanks a lot. It's important information for me.」（ありがとう。僕には重要な情報だよ）

40分ほど話し合ってから、賢は2人を連れて接遇室を出て、EXITの前で数馬を待った。やがて出口に皮のトラベル・バッグを提げて数馬が元気な姿を現した。

「おう、賢、悪かったな。酷い雨でフライトが遅れたんだ」

「やあ、数馬、元気そうじゃないか。ちょっと紹介しておくよ。ここのふたりは、さっき失踪から帰還したばかりの、浮石さんとキム・ヨンエさんだ。浮石さん、キムさん、こちらは僕の友達の樋口数馬さんだ」  
賢は数馬の名前にアクセントを置いて紹介した。ふたりは頭を下げた。キム・ヨンエも理解したようだった。数馬はびっくりしたようにふたりを見たが、軽く会釈しただけだった。賢は3人を連れて駐車場に向かった。幸い雨は上がっていた。雨で濡れた道央国道337号線を家に向かった。車中で賢と数馬はプロジェクトの現状を確認し合った。賢が自分の置かれている立場を説明すると、数馬はそれが何らかの陰謀によるものではないかと言った。賢はその考えには立ち入りたくなかった。

「賢、MIプロジェクトが規模を縮小して、VS館の様な従来路線を走るのなら、国民の精神性の改革などという大それたテーマを掲げるのは止めて、単なる児童教育の一環程度にしてしまった方が、まだ成功する可能性が高いだろう。そう思わないか？もし、東領製作所に何か意図があって、政府官僚にそのような方向転換を具申しているのだとすると、我々は東領製作所に追従する姿勢を見直さなくてはならないぞ。賢、おまえ、独立しないか？独立して、ビジネスとして、意識改革を標榜する企業を立ち上げるか、原さんがやっているオーラビジョン・システムの拡販路線で霊的側面から、意識改革を図るとかしたらどうだ？」

「うん、その話はじっくり腰を落ち着けて話そう。その前に、今日は、これからどうするかを考えておく必要がある。あまりマスコミに騒ぎ立てられずに、浮石さんとキムさんに、どのように元の場所に帰還してもらおうかということを考えなくてはならない」

浮石が言った。

「僕たちのために、申し訳ありません。僕は先ず、両親と、友人に電話を掛けたいのですが・・・」

「そうですね、僕の家に着いたら、電話したらいいです。でも急ぐ必要はありませんよ。もう1年以上経っているんですからね。僕の家には女性が2人居ます。2人とも会社の同僚です。彼女たちが、世話を焼いてくれるでしょう。後で紹介しますね」

「Miss Kim, do you remember the telephone number of your house?」  
(キムさん、自分の家の電話番号、覚えていますか?)

「Yes, of course. I would like to call my family. May I do it?」(はい、勿論です。家族に電話させていただきたいです。してもいいですか?)

「Yes, you can call your family as soon as possible after we arrive at my house. But, don't say you are in Japan. Because, I shall take back you to your home by teleportation light after your talk on phone with your family. You understand?」(ええ、僕の家に着いたら、できるだけ早く家族に電話してください。だけど、あなたが日本に居ることは言わないで。と言うのは、君の家族との電話が終わったら、僕が直ぐに君をテレポテーションで君の家に連れて行くから。分かりますか?)

「What is teleportation?」(テレポテーションって何ですか?)

「It's the same method to bring you as we came back from that forest.」(あの森から戻って来たのと同じ方法だよ)

キム・ヨンエは理解したようだった。急に表情が明るくなった。賢は、自分が2人を連れ戻したことは、警察やマスコミに口外しないように頼んだ。ふたりとも了解した。家に着いたのは8時近くだった。梓と康子が入り口で出迎えてくれた。部屋の中は暖房が効いていて、フワッとしたぬくもりを感じさせた。賢は先ず康子に数馬を紹介してから、梓と康子に失踪から帰還したふたりを紹介した。それから梓に頼んで、買い置きのパンを持って来てもらい、ふたりに食べさせた。康子が全員にコーヒーを入れて出した。

賢は先ず、キム・ヨンエに韓国の自宅に国際電話を掛けさせた。ヨンエ

は韓国語で会話した。誰も韓国語は分からなかった。電話をしながらヨンエは泣いていた。泣き声が次第に嬉々とした声に変わり、ヨンエは電話を切った。電話を切ると、ヨンエは袖口で涙を拭こうとした。梓が、横からハンカチを渡した。ヨンエはにっこり笑って、そのハンカチで涙を拭い、頭を下げたそれを両手で梓に返した。賢は梓にラップトップPCを持って来るように言った。梓がPCを持って来て、テーブルの上にセットすると、賢はグローバル・アースでヨンエの家を確認した。家は直ぐに見付かった。家の近くの明るい場所をヨンエに教えて貰い、その位置を確認した。それはショッピングセンターだった。ヨンエはそこが夜10時まで開いていると言った。賢はヨンエに、そこにテレポテーションするので、もう一度両親に電話して、10分後に迎えに来るように伝えるように言った。ヨンエが電話を済ますと、賢はヨンエを促して一緒に居間の中央に立ち、ヨンエを抱きしめた。他の4人はただじっと、賢の動きを見つめていた。やがて賢は瞑想状態になってその場から消えた。

賢はショッピングセンターの外の中空に自分とヨンエが浮いているのを確認し、静かに、誰も居ないエントランス横に着地した。ヨンエの目に涙が溢れている。ヨンエは賢を促して、エントランスに入った。中は広い空間だった。少し歩くと、噴水が見えた。点滅するデコレーション・ライトの光が噴水の水に反射して、きらきら輝いていた。ヨンエは言った。

「My father and mother will come here soon.」（お父さんとお母さんが直ぐにここに来ます）

ヨンエは周りをきょろきょろ見回している。そして、エントランスの方角からやってくる両親の姿を見つけて、飛び上がりながら手を振った。賢は瞑目して、その場から自宅にテレポテーションした。

賢はリビングの中央に戻った。意識がはっきりすると、賢は呆然と立って待っている4人に向かって言った。

「キム・ヨンエさんはご両親に迎えに来てもらった。今頃、涙の再会を果たしているだろうな」

梓は「この人は本当にスーパーマンだ」と心の中で言った。数馬は賢の能力が飛躍的に高くなったのに驚いて、言葉を失っていた。康子は、「自分はこの人にはふさわしくないのかも知れない。だけど絶対離れたくない」と思った。浮石は「今度は自分の番だろうか?」と思った。賢が言った。

「浮石さん、お待たせしました。ご自分の家に電話をしてください。あなたも、何処か実家の近くの安全な場所を教えてくださいませんか? 僕がテレポーションで連れて行きましょう」

浮石は家の近くのあまり車の走っていない路上でいいと言った。自分で歩いて帰るつもりのようなだった。賢はPCで浮石の言う道路の位置を確認した。

「浮石さん、これからは瞑想状態になるときは注意してください。意識が薄れそうになったら、現実のもの、例えば水を飲むとかして、いよいよ危険だと感じたら、柱に自分を縛り付けるなどして、自分の身体を現実の中に安定させる努力をしてくださいね。何かあったら、僕に連絡してください」

そう言って、賢は自分のポケットから財布を取り出し、そこから名刺を1枚抜いて浮石に渡した。浮石はそれを大切にポケットに入れた。浮石は自宅に電話を掛けた。

「もしもし」

「もしもし、浮石でございますが、どちら様でしょうか?」

「俺だよ、俺」

「もしもし、俺では分かりません。名前をおっしゃってください」

「康夫だよ」

「もしもし、どちらのヤスオさんですか?」

「かあさん、俺だよ。分からないの?」

「あなた、息子の名前を騙って、お金を取ろうとしても、そうは参りませんよ。家にはもう息子はおりません。警察に訴えますよ」

「かあさん、まだ分からないの? 康夫だよ。北海道大学に行っていて、友達と旅行に出ようとして、千歳空港で失踪した康夫だよ」

「康夫さん？本当に康夫さんなの。あの子はもう死んでしまっていて、お葬式も済んだのよ。どうしたの？あなた康夫さんなの？・・・おとうさん、おとうさん・・・康夫よ、康夫から電話が掛かってきたの！」母が父を呼ぶ声が響いてきた。バタバタと廊下を駆ける音がして、父が電話口に出た。

「もしもし、康夫か!?本当に康夫なのか!？」

「そうだよ。俺だよ。康夫だよ。とうさん、俺、失踪から戻ったんだ。もう少ししたら、家（うち）に帰るよ」

「今、どこに居る？おとうさんが迎えに行くから待っているよ」

「直ぐ近くに居るよ。それより、家に居て待っていて」

「直ぐに帰って来るのだな？分かった。待っている。おかーさん！康夫が帰って来るって、おい、直ぐに支度をしろよ！」

浮石の家は大騒ぎになっているようだった。康夫が電話を切ると、賢は浮石に言った。

「家に戻ったら、警察に報告して、事情聴取を受けなければならないよ。その時、いろいろ聞かれるだろうけど、あの森のことなどは話さない方がいい。ただ、「よくわかりません」とだけ言っていた方がいいよ。そうしないと、悪くすれば、君は気違い扱いされかねないからね」

浮石は承知した。賢はリビングの中央で、浮石に自分の腰にしがみつくように言うと、瞑想状態になり、浮石の実家に通じる道路の歩道の上にテレポーションを行った。浮石をその場に残すと、賢は直ぐに自分の家にテレポーションで戻った。賢は非常に疲れた。家に戻ると、ソファにどっかりと腰を降ろした。

「疲れた！数馬、ごめん。もう少し待っててくれよな」

「賢、謝るのは俺の方だ。おまえの事情も聞かずに舞い込んだんだから。大変そうじゃないか。まあ、ゆっくり休んでくれ」

賢は呼吸を整え、気の巡りを戻し、プラナーの吸収を意図して、瞑想に入った。みるみる身体にエネルギーが充満してきた。賢は瞑想を解き、目を開けて言った。

「数馬、おまちどおさま。さあ、プロジェクトの話をしようか」



「おいおい、休憩してまだ5分しか経たないじゃないか。大丈夫か？」  
「うん、大丈夫だ。おっ、そうだ。夕食を忘れていた」

梓が言った。

「賢さん、夕食の支度は整っています。浮石さん達が来るとは思わなかったのです、4人分しか用意してなかったのです。だから、声を掛けそびれてしまっていて・・・」

賢と数馬は喜んだ。

「梓、康子、大変だったね。ありがとう。じゃ、早速夕食をいただくか。もう9時になるから、君たちもお腹が空いだろう」

康子は、自分が場違いなところに居るのではないかと思い、そわそわしていた。賢はそれを感じ取った。

「康子、ご苦労様。なんだか、僕の家を手伝いに来みたいだね」

「いいえ。私、とても楽しいです。こんなに楽しい思い、まだ両親が生きていた幼少の頃以来のような気がします」

梓が言った。

「それはそうよ。だって、賢さんのやっていることは、ほら、あのスーパーマンと同じようなことでしょう。テレポテーションがあるから、スーパーマンより凄いわよ。スーパーマンは空を飛んで行くけど、賢さんは時空間を超えて行くんだから」

数馬は笑った。

「わっはっはっはっはっは・・・その通りだな。賢、おまえ、全くスーパーマンみたいだ。はっはっはっは・・・その内、飛んでいる弾丸も手で掴むことができたり、走っている電車を持ち上げたりできるようになるのかな？」

「あんな、数馬、あれはSFの世界だろう。俺がやっていることなんかは時期が来れば、誰だってできるようになるぜ。あまり、大げさに言うなよ」

「賢、そう思っているのはお前だけだよ。お前の能力は先天的なものだな。それに後天的な知識が加わって、今までに見たこともないような力が現れてきたんだろう」

「俺は、いろいろな先生や、友達に恵まれたから、人より早くこういう能力が現れてきたのだろうな」

「だけど、お前には物質化も出来るって噂があるんだぞ。そんなことできる訳ないよな。イエス・キリストじゃあるまいし」

「出来るよ。複雑なことはやったことないから、どうか分からないけど。シンプルなパンだとか、飲み物だとか、人間の創ったものでも簡単な構造のものだったら物質化できる」

「本当なのか？おい、ちょっと見せてくれよ」

「本当は、エネルギーを使うから、あまりやりたくないけど、久しぶりにはるばる遠方から俺に会いに来てくれたんだから、やってみるよ。で、何を出せばいい？」

「そうだな。亮子が喜びそうな・・・そうだ、夫婦茶碗なんてどうかな？」

「のろけられたな。よし、静かにして、見ているよ」

賢は瞑目して、美しい桜の絵の描かれた茶碗を2つ頭すことを意念した。一つは少し小型をイメージした。5分ほどして、食卓の数馬の座っている端に茶碗が二つ現れた。瞑目を解いて賢が言った。

「数馬、こんな絵柄でいいか？」

数馬は驚嘆した。賢が冗談を言っているのだと思っていたが、それを目の当たりにすると、マジック・ショーを見ているような錯覚に陥った。

「おれは、どうかしてしまったのかな？この世界の物事が、もう、今までの規範では判断できなくなってきた。これは、大変なことだ。おれはお前があつたファミレスで消えてから、次々に起きてきた事だけで、頭が混乱していたんだが、もう、何らかの理論立てた説明がないと、今やっていることにも自信が持てなくなったよ」

「おいおい、大げさに言うなよ。元々この世界は、こういう事が自由にできる世界なんだ。こういう事は大して意味のないことだから、生まれたときに人間の能力の表層から消されているだけだよ。幽界に入れば、これと同じ事が誰でも自由にできる。もっとも、自分がこれをできると心の奥の奥の奥のずっと奥で確信していればの話だけれどな。数馬、そ

れに梓と康子も、よく聞けよ。この世界は表裏で構成された世界だ。表を物質界と観ると、裏は霊界だ。それは数学的な表現を使うと実と虚で現せる。それから、道教で云う陽と陰でも同じだ。本当は陰が表で、陽が裏なんだがね。どちらも極まると反転する。その構造は将に、サイン波のピークと同じようなものだ。そしてね、無限小は無に帰すだろう？ 実はその向こうに無限大があるんだ。だから、逆に無限大を極めると無になる。宇宙の果てを見ようとする、無に近付いてゆく。それは大きさという時空の概念から、意識の概念に転換しなくては理解できないかも知れない。だから、ビッグバンは証明できないけど、事実だろう。地球上のどこから見ても無限遠点の方向が見える。そこを突き詰めるとビッグバンの元の無限小点になる。それが事実なんだ。今の常識的な科学では説明できないだろう。だけど事実なんだ。表裏はエネルギーを介して繋がっている。表裏のバランスの取れているところがゼロエネルギーだ。それが表裏が一体となった状態で、陰陽のバランスの取れた状態だ。その状態からは実・虚のいずれの方向にも作用できる。それは物質と心が一体になっていて、例えば、心を動かすと物質が動くということを意味するんだ。それが全て理解できて、あらゆる物質・現象を自分の意識に転換できるようになると、さっき僕がやったことは簡単にできるようになるよ。自分の身体自体が宇宙で、細胞一つ一つにDNAとRNAという仕組みが組み込まれているだろう。それが光とリンクしているという事に、素直な目を向けて、それを理解するのが先決だよ。意識は光にリンクしているから、具体的には、物質や現象を光として捉えて、意識に転換できるかどうか物質化の鍵だと思う。そうできれば、全ての事象・事象は光を操作するのと類似の手法で、変換、操作できるはずなんだ。この理念を自己の中に実体化できると、この物質界では物質操作に関するあらゆる事が可能になるよ。少し理屈っぽくなったな。まあ、今の僕はそこまでは到達している。後は残されたDNAの情報スイッチを全てONにして、次元を超えて生きることができるようになれば、本来の自分自身が見えてくると思うよ」

「おい、賢、以前より、随分理論立ってきたじゃないか」

「原さんが近くにいるからな。近くって、意識という意味でだよ。それにムクウさんが指導してくれているから」

梓が間に入った。

「賢さん、今のお話、世界中に知らしめたらいかがかしら？世界にはこういう理論を具体的な数式なんかで表現するのが得意な人たちが沢山いるでしょう。そういう人たちの力を使ったらどうかしら？」

「うん、その内にそうなるだろうね。だけど、焦る必要はないよ。この宇宙は必要なときに、そうなるようになっているからね」

康子は黙って食事をしていた。賢が話すことは全く分からなかったが、ただ、賢の側に居るだけでよかった。食事を終わると、2人の女性は片付けを始めた。賢と数馬はソファーに移動して、寛ぐことにした。

「賢、さっき車の中で言った事だけど、真剣に考えてみないか？」

「会社を辞めて、独立する件か？・・・もう考えているよ」

「なんだ、そうならそうと言ってくれればいいのに。で具体的にどうするつもりだ？」

「その前に、今回、お前が来た目的を説明するのが先じゃないか？」

「おお、そうだな。電話でもちょっと話したけど、俺はな、日本人の意識改革は、VS館建設レベルの取り組みじゃどうにもならないと思っているんだ。それで、お前が提唱していた試行サイトの建設に全力投入をするように会社に働きかけてきた。それで、我が社では、社運を賭けて試行サイトの建設に対してフライングで取り組む決断をして、開発を開始していたんだ。勿論VSの方もやりながらだけどな。VSの方は外注に出して、試行サイトのシステムの方は自社開発をしてきたんだ。もう構造設計も終えた段階だ。今までの投資金額はそれほど大きくはないけど、社の意識が高揚してきていたときの中止勧告だろう。もう、会社の中で喧々囂々の大騒ぎになったんだ。おそらく他の3社もそうだと思うぞ。俺自身もお前の計画を推挙した張本人として、吊し上げを喰らっている。まあ、責任を取らせられる所までは行かないが、何とか突破口を作らなくちゃならないんだ。それだからと謂うわけじゃないが、お前に独立して、あの計画を継続推進して欲しいと思って打診に来たんだ」

康子が包みを持ってソファの所に来て、その包みを数馬に渡しながら言った。

「あの一、樋口さん、これ、さっき賢さんが物質化した茶碗です。丁度いい箱があったので、その中に入れましたから、衝撃さえ与えなければ割れることはないと思います」

「あつ、済みません……ああ、そうだ。俺もおみやげを持ってきたんだつ」

そう言うのと数馬はソファの上に置いてあったトラベル・バッグから紙袋を取り出し、康子の渡してよこした包みを丁寧に中に納めた。

「これ、亮子が作ったクッキーだよ。みんなで食べてくれって」

「やさしい奥さんだな。数馬は幸せもんだ」

「また、冷やかす！」

「みんなで、いただいてもいいかしら？」

「そうだな。いただきよう。数馬ありがとう」

康子が紙袋を手にしてキッチンに行き、皿の上にクッキーを盛り付けて持って来た。梓と一緒にコーヒーを入れて来てソファのテーブルに並べた。

「その話だけどな、俺もじわじわと排除されるような形にされてきているから、ここらで身を引こうと思っている。それに、原さんが凄い装置を発明したんだ。それを商品化しなくてはならない。原さんは、今のオーラビジョン・システムだけでも手が廻らなくなってきているだろう。そろそろ俺が本気になって参画しないとまずいと思うんだ」

「その新しい発明、差し支えなかったら教えてくれないか？」

「絶対秘密だぞ。まだ試作段階だからな。それから、梓も康子もいいな」

「勿論だ。何なら誓約書を書いてもいいぞ」

ふたりの女性も頷いた。

「誓約書なんて必要ないよ。それに誓約書なんて意味ないしね。実は原さんが物質転送機を発明したんだ。もう実験もやった」

「おい、今何と言った？」

「物質転送機を発明したと言ったんだ。どこでもその位置と、その空

間の状態が分かれば、好きなところに物質を転送できる装置だ」

「おい、冗談だろう。今の科学技術でそんな装置が出来るはずはないだろう」

「出来るんだよ。さっき僕が話した原理がベースにあるんだ。後で、デモをやってやるよ。びっくりするぞ。世界が変わるよ」  
梓が言った。

「私も見ました。あまりの驚きに、言葉を失いました」

「私も見ているもいいんでしょうか？」

康子が言った。

「勿論だよ。君も僕の友達じゃないか。だけど、さっきも言ったけど、このことは誰にも話しちゃ駄目だよ」

「はい、誰にも話しません」

「賢、現実的なことを聞くけど、もし、お前が独立して、新しい企業を立ち上げるか、今の原さんの事業を拡大したら、収益は見込めるのか？」

「多分ね。膨大な収益になるだろうな。それも短期間にな。第一、今の輸送システムを崩壊させるだけの力があるからな。それと、今売り出しているオーラビジョン・システムも、実は凄い力を持っているんだ。相手が誰かが分かっていたら、相手が何処にいても、通信手段を何も持っていなくてもコミュニケーションができるという機能を持っているんだ。この機能は、現在のマシンでは隠し機能にしてあるけどね」

「それは凄い。もう、頭がごちゃごちゃになっちゃったよ」

賢はクッキーをひとつ手にすると、バリッと嚙った。

「奥さん、クッキー作りいつ覚えたんだ？随分美味しいじゃないか。梓、康子、いただけよ」

「もう、いただいています。ねえ、康子さん」

「はい、かすかな柚の香りがして、とっても美味しいです」

賢はコーヒーを啜った。

「数馬、亮子さんにお礼を言っておいてくれよな」

「ああ、分かった。それで、実は俺も、一大決心をしようと思っているんだ。お前の会社に入ろうかと思ってるな」

「えっ？それは大歓迎だけど、亮子さんが心配するだろう。収入の保証が無くなる上に、来年にはベビーが誕生するんだから」

「今、収益は大丈夫って言ったじゃないか」

「それはそうだが、亮子さんが心配するのが気掛かりなんだな。身体に影響しなければいいんだけど……」

「それは俺が上手く話すから大丈夫だ」

「よし、分かった。それじゃ、一緒に新しい会社を設立しよう。今のオーラビジョン・システムの会社ウチミシステムは製造会社として、物質転送機も製造する。そして、販売部門は独立した会社が行うようにする。その会社は販売の収益の一部を使って試行サイトを運用する。試行サイトの運営は社団法人で行うのがいいかもしれないな。製品を作る訳じゃないからな……いや、いや、やはり株式会社にしよう。販売で十分な収益を上げないと、試行サイトの運営が難しくなる危険性があるからな。俺はウチミシステムズの社長になる。数馬はシステム販売と試行サイト運営会社の代表取締役になってくれるか？」

「うん、分かった……本当に収益は大丈夫だろうな？」

「まあ、これから、試算するさ。お前の努力次第だな」

「おいおい、何か不安になってくるな……」

「不安は禁物だぞ……それはお前もよく知っているだろう」

「よし、今日は門出の杯を交わすとしようか？」

その時梓が言った。

「あの一、私も仲間に入れてくださいますか？」

「梓、いいのか？リスクがあるぞ」

「私はあなたの女房役です。近くに居なくてはなりません」

康子が言った。

「私もその会社で働かせていただけませんか？」

「康子まで……本当にいいのか？」

「私も、賢さんと一緒に働きたいのです」

「分かった。じゃ兎に角一度、原さんに電話して確認をしよう」

賢が電話口に立つと、丁度その時、電話が掛かってきた。

「もしもし、内観です」

「もしもし、わたくしは浮石と申します。息子が大変お世話になりました、何とお礼を申し上げていいか分かりません。本当にありがとうございます。何かお礼をしなくてはと思ったのですが、とりあえず、電話でお礼を申し上げることだけでもしておこうと思ひまして……」

「息子さんは何とおっしゃっていましたか？」

「はい、あなた様に助けていただいたとだけ申しております。そのほかのことは何を聞いても覚えていないと申します。あなた様のお電話番号も、無理矢理聞き出した次第です」

「そうですか。僕はたいしたことはしていませんので、もう忘れてください。それより、息子さんが記憶を無くされていて、どうして戻って来られたのかもよく分からないとおっしゃるので、そうしておいた方が、警察やマスコミへの対応は楽だと思いますよ」

「でも、私どもはテレビであなた様のことを何度も拝見しています。失踪事件が解明するときいつも、あなた様が関係していたように思います。私たちも、これまで、何度もあなた様にお縋りしようかと考えましたが、しかし、あなた様が東領製作所の幹部の方だと知って、控えていました。でも、こうして、息子の帰還が叶い、やはりあなた様に救っていただいたと聞くと、一度お礼に伺わなくてはいけないと思ひまして」

「いいえ、お礼には及びません。帰還は全て息子さんの意志によるものですから。私は触媒のような形でお手伝いしただけです。先ほど申し上げましたように、私のことはお忘れになって、表に出さないでいただきたいのです。よろしく願ひいたします」

「そんな風におっしゃっていただくと、大変申し訳なく思ひますが、あなた様もそのように望まれておられるようですので、お伺ひすることは控えさせていただきます。本当にありがとうございます」

浮石の父親からだった。賢は康夫が無事帰宅できたことを知って、嬉しかった。一旦受話器を置いてから、賢は原に電話を掛けた。

「もしもし、原さんですか？賢です」

「賢さん、丁度よかった。今電話しようと思ひていたところです。物質



転送機のお披露目の件ですが、どうしようかと思ひまして」

「その件も含めて、僕からも原さんに相談したいことがあるんです」

「何ですか？」

「僕は、今の東領製作所を辞めようと思っているんです。ウチミシステムズの仕事一本に絞ろうかと。原さんどう思いますか？」

「それはもう、どうもこうもありませんよ。僕はいつそうしてもらえるのか、ずっと待っていましたから」

「よかった。それで、もう一つ会社を創ろうと思うんです。主にOVSや物質転送機を販売する会社です。その会社に意識改革の為の実験サイトの運用もさせるつもりです。これはまだプロフィットについてのヴィジョンが見えませんが、ここを数馬に受け持ってもらって、僕は原さんと一緒にオーラビジョン・システムと物質転送機の開発・製造に全力投入しようかと思っているのです。どうでしょう」

「いや、賢さん、やっとその気になってくれましたね。これで、僕も完全にフリーで研究開発に没頭できます。まだ、やりたいことが山ほどあるんです」

「原さん、北海道に来ませんか？愛子がロシアに留学したら、こっちに移って来ませんか？工場の方は、副社長に任せておけばいいでしょう。僕は不動産会社に交渉して、なんとかこの土地を手に入れます。ここには3000坪ほどの草原があるんです。そこに工場を造ったらどうかと思うんです。それに、朗報があります。梓と、もう一人僕の札幌支店の時の同僚、雪坂さんという女性が参加してくれることになりました。今度、会社を設立するにつけては、人を集めなくてはならないでしょう。大勢の人に参加してもらわなくてはなりませんから、これから忙しくなります」

「賢さん、これは楽しくなってきました。ちょっと待ってくださいね。今、愛子さんが来たようですから……」

「もしもし、賢パパ、元気になっている？」

「愛子、それは僕の言葉だよ。愛子は元気か？こっちはいろいろ新しいことが起きて、毎日が楽しいよ」

「ほら、やっぱり、賢パパばっか楽しんでる。だけど、私も結構充実してるんだ。賢パパ、担任の先生が、鳳凰高校を受けなさいって言うんだけど、どうしたらいいと思う？それから、一時休学してロシアに留学した方がいいって」

「鳳凰高校って、あの日本一学生の偏差値の高い高校か？」

「うん、私はあまり乗り気にならないのよ」

「僕も、あまりお勧めじゃないね。もっと自由に青春を楽しめる高校の方がいいよ。勉強ができて、金持ちになれるだけだからね。大きな家に住んで、毎日美味しいものを食べて、世界中を旅行して、感動を失ってって、この世を去るときに、自分は全部手入れたけど、達成感がないと感じる人生を生きることになってしまうかも知れないよ。それより、たまに行く旅行で新しい街を見て感動し、たまに食べるレストランの食事に感動するような、生きた生活をした方がいいんじゃないか？」

「賢パパ、私もそう思う。だから、高校受験はしないで、いきなりロシアの高校に留学しようと思う。それでいいかな？」

「それだけ分かっていたら、愛子の好きなようにするといいよ」

「うんそうする。じゃ、もう切るね」

「ちょっと待って、原さんが変わって……原さん、あの、ちょっと頼みがあるんですけど、この間の実験をもう一度やってくれませんか？」

「実は、僕もそれを今日、お願いしようとしていたんです。今日は生物を送ってみようかと。生き物がどうなるのか、ちょっと残酷な実験ですけどね。賢さん、オーラビジョン・システムも使いたいので……」

賢は全員を連れて自分の趣味の部屋に移動した。そして携帯でもう一度原に電話を入れた。

「原さん、準備できましたよ。今度はこの間と違う場所にいますけど大丈夫ですか？」

「また、携帯型の位置情報送信機を設置してください。そして、値を読んでみてください」

賢が送信機を部屋の中央に持って行って電源を入れると、原が数値を読み取れたと言った。

「今から、キャベツを送ります。それから、ゴキブリを1匹送ります」

「えっつ？もっと他の生物はいないの？」

「それじゃ、蜘蛛もつかまえてありますから、それでもいいですけど」

「いいよ、いいよ、ゴキブリで。ビニールの袋か何かに入れてあるね？」

「はっはっはっは、大丈夫ですよ。今のゴキブリは大分弱っていますから、逃げ出したりしませんよ。ちゃんと網袋に入れて送りますから。ビニールだと、少し、ややこしいことになるかも知れないので」

「はっはっはっはっは・・・これが上手くいけば、物質転送機で家中のゴキブリを、外に追い出せるな。はっはっはっは・・・」

数馬は目を見張っていた。賢以外は誰も笑わなかった。3人とも真剣な面持ちで、送信機を凝視している。やがて、送信機の近くにキャベツが出現した。初めはぼーっとしていて、次第にはっきり見えるようになってきた。

「原さん、キャベツ、届きました」

「キャベツは成功ですね。じゃ、お邪魔虫、送ります」

数馬と康子は驚いて、ただ、じっとキャベツを見詰めている。賢は急いでキャベツを取り除けた。暫くすると赤い網が現れてきた。中にゴキブリが動いている。原の言うように、あまり元気がない。

「いやー、わたし、ゴキブリ大嫌いなんです」

康子が言った。賢は携帯のマイク部分を手で塞いで

「馬鹿だな、送ってもらう前に言えばいいのに。それじゃ、これは原さんに送り返そう。僕が話すよ」

と言うと、原に向かって言った。

「原さん、ゴキブリ正常に送られてきたようです。動いていますよ。でも、転送前後の生態の確認は原さんがやった方がいいでしょう。今の物をもう一度そちらに返送できますか？」

原は、賢の意図に気付かずに言った。

「勿論、できますよ。僕もゴキブリの状態を実際確認してみたいから、そのまま手を触れないでください。こちらに戻しますから・・・」

ゴキブリは直ぐに消えてしまった。原が言った。

「やりましたね。これで生物も大体大丈夫のようですね。もともと、空間の一部を入れ替えているだけですからね」

数馬が言った。

「賢、凄いな。俺は、この時代に生まれてよかった。もう少し早く生まれていたら、こんな事は何も知らずに死んでいったらろうな。本当に凄い。おまえ、世界が変わるぞ。この機械の可能性は無限だよ」

「俺もそう思うよ」

原から連絡があった。

「賢さん、物質転送機は終わりにしましょう。次の実験です。オーラビジョン・システムのスイッチを入れてください。それから、画面の見える位置に居てください」

賢がマシンを部屋の中央に持って来て、電源スイッチを入れた。例の奇妙な音がしてから、画面にイニシャルメッセージが出た。

「原さん、スイッチ入れましたよ」

「ありがとうございます。賢さん、実はそのマシンは、呼び出す対象のアクセス制御機能を外してあります。だから、使うときは注意してくださいね。荒い波動の人も現れてきますから・・・まあ、それはいいとして、そのマシンは、霊界との通信ばかりでなくて、生きている人との通信もできるはずですよ。それで、今日は試しに賢さんと愛子さんに通信してもらおうと思ったんです。だから、愛子さんと呼んだんです。賢さん、いいですか？」

「勿論だよ。どうやればいいのか？」

「麻子さんの時と同じですよ。ただ、愛子さんに照準を当てればいいんです。それだけです。先ず、ヘッドギアをつけてくださいね」

賢はまず、携帯電話を梓に渡し、原との通話を引き継いでもらった。それから、箱の中からヘッドギアを取りだし、それをマシンに接続してから頭部に装着し、マシンのスイッチを入れた。これまで何度もやった慣れた操作だ。マシンはスタンバイ状態になった。賢は意識を愛子に向けた。愛子の顔が画面に現れた。にこにこ笑っている。愛子が横を向いた。携帯電話に原の声がかすかに聞こえてきた。

「愛子さん、何か唄ってみて」

「愛さんが歌を歌うわ。原さんが歌うように言ったみたいよ」

賢は画面の下にあるスイッチを押した。愛子の歌声が響いてくる。賢のよく知らない曲だった。どうやら、最近の曲のようだ。賢は愛子に向かって話し掛けてみた。

「愛子、僕が分かるか？」

しかし、何の反応もない。それは当然のことだと賢は思った。このシステムは一方通行のシステムである。また愛子が横を向いた。梓が言った。

「今度はなにか、あなたにお話しするですよ」

「賢パパ、私の声が聞こえているの？私の顔も見えているんでしょう？そう、少しは色っぽくなった？・・・あー、あー、ただいまマイクのテスト中・・・原さん、他に何を話せばいいかな？」

そう言いながらまた、愛子は顔を横に向けた。賢は通信のスイッチを切り、電源を落として、ヘッドギアを外した。

「このシステムは、通信用のシステムとしては、不向きだな。遭難時の救助とか、行方不明者の捜索とか、特殊な用途に絞られてしまうな。通信する両方が1台ずつこのマシンを持てばいいけど、値段が張りすぎるから、テレビ電話や、PCの通信システムには負けるな」

梓が携帯を賢に返してよこした。数馬が言った。

「賢、そうばかりとは限らないぞ。このマシンにもかなりの可能性を感じる。例えば、病院での患者の経過観察、インフラの無い土木作業現場での作業員の状況把握、家庭に設置して不意な外出時の家族の所在確認、保健付保時のSOS連絡装置、ちょっと考えただけでも、いろいろな用途があるじゃないか」

「数馬、冴えてるな。直ぐにそう云う発想が出るのは凄い。これは数馬にもウチミシステムの商品企画に参画して貰わないとな」

「賢、会社の設立の前に、原さんと愛子さんを交えて、一回協議しよう」  
その日、4人は冷蔵庫にあったワインで乾杯をした。12時を回っても話は尽きなかった。数馬は和室の客間で休んだ。康子は洋室の客間に落ち着いた。翌日の土曜日は朝から全員で会社の設立計画と会社の理念を

明確にし、定款を作成した。時間の関係もあり、株式会社として募集設立を行うこととした。近頃は以前のような複雑さが無くなり、直ぐに株式会社を設立することができる。発起人は数馬、賢、原、梓の4人とし、数馬を代表取締役、他の3人を取締役とした。いずれ、原智明語録研究会の正会員の中の希望者に、部長以上のポストに着いてもらうことにした。資本金は3000万円とし、株式は基本的に4人で出資することに決めた。実際には、新会社として銀行からの借入は難しいので、4人が分担して3000万円を拠出することにした。数馬は貯金が2000万円ほどあるが、それを全部拠出することは難しいと言った。亮子と相談して1000万円なら拠出できると言った。残りの2000万円を3人が出資することになった。しかし、賢にはもう手元に残金が無かった。毎月梓に返済している金もあり、出資できる余裕はない。梓もインドの爆破時に賢に貸した2000万円の内、まだ、10分の1ほどしか返済を受けていなかった。原はオーラビジョン・システムの売り上げが伸び、社長としての給与が毎月300万円ほどになっていたの、賢と梓は原から借金することを考えた。梓が言った。

「私が1000万円出します。後は原さんと、賢さんが出してください」現実的には募集は形式程度に抑えることになった。賢は業務内容のとりまとめを行った。数馬は興奮していた。

「賢、新会社はいつからスタートできるかな？」

「まあ、1ヶ月もあれば大丈夫だろう。先ず、小さい事務所を持たなくてはな。当面、この家の研究室を事務所にしたらい。数馬、俺が不動産会社と交渉して、ここを手に入れられることになったら、直ぐに、この家の裏の土地を本社として登録しよう。勿論小さくてもいいから、それまでに事務所を建設しなくてはならないな」

おおよその構想が出来上がり、定款の認証の為の書類を作成して、法定手続きが済めば、すぐに会社をスタートできる準備が整うはずだった。もう、陽も暮れ掛かっていた。全員が疲れてソファで寛いでいると、康子が言った。

「あの一、私は、どうしたらいいでしょう。何の役にも立たないようで

すが・・・」

康子は自分が蚊帳の外にいることに、侘びしさを感じていた。賢は康子の心の動きを察知していた。

「康子、君には僕の秘書になって貰おうかと思っているんだ。今日の話は、もう一つの会社の話だから、君には直接関係しないんだよ」

途端に康子の顔が明るくなった。梓が言った。

「賢さん、あなたの秘書は私が兼務しますから、必要ありません。康子さんには総務部門に入っていたらどうでしょう」

「そうだな。だけど、総務部門じゃ康子の能力からしたら、勿体ないな。

それじゃ、康子には数馬の秘書をやって貰おうか？」

康子はあまり嬉しそうではなかったが、黙って頷いた。賢は数馬を連れ、夕食を兼ねて、札幌に出向くことにした。数馬も札幌は久しぶりだった。車を街中の駐車場に止め、4人ですすき野を歩いた。康子の案内で4人は海鮮料理の店に入った。北海道の海鮮料理は美味しかった。数馬は料理を堪能した。賢と数馬は杯を傾けた。康子も共に呑んだ。帰りは梓が車を運転した。

数馬は翌朝の便で東京に戻った。梓が亮子へのみやげに牛乳せんべい買って数馬に渡した。2人の女性も賢に附いて空港まで見送りに行った。数馬の決心は賢に大いなる勇気を与えた。

その日の夜のムクウの修練は、善悪の彼岸についての話だった。

「賢、この世界には、いつの間にか道徳律というものが出来上がってしまった。それは人間が自らを律する目的で作りに上げたものだ。中国の老子が書いた「道徳教」なるものを読んだことがあるだろ。あそこに書かれている内容は、この3次元宇宙のことわりを内に秘して、3次元の表現で著したものだ。今日から、暫くそのエッセンスを解いて聞かせよう。道徳教の中の第20章にこんな事が書いてある。「学問なんかやめてしまえば、心配ごとはなくなるだろう。「はい」と「おう」の返事にどれだけの違いがあるというのか。善と悪とに何ほどの違いがあるのか。人の畏れることは、畏れないわけにいかないだけで、さっぱり決め手はない。衆人はうきうきとして、ご馳走にありついたときのよう。春の日に

高台に登ったみたいだ。わたしだけは、ぼそとして、動く気配もなく、赤ん坊が、まだ笑いもしないときのよう。そして、うろうろとして、帰る家もない捨て犬のようだ。衆人はみなゆとりがあるのに、わたしだけは仲間はずれにされたみたいだ。わたしはうかつなのろまなのだよ。俗人は世間に目立つが、私だけはいっこうに目立たない。俗人は小利口だが、私だけは要領を得ない。ゆらゆらとして、海のように、吹く風のあてどもないみたいだ。衆人はみな、わけがありげだが、わたしだけは、かたくなで野暮くさい。わたしだけは、人とは違って、生命の糧が大切だ」 どうだ、賢、この言葉を聞いて、どう思う？」

賢は今の話がどこかバウルの生き方を説明しているように聞こえた。

「はい、この3次元はそのように生きるのが一番だと思います。大自然、そして、与えられたものは、それを替えることも、消すことも、新たに加えることもできないと思っています。元々、無から展開しているのが、この世界でしょう。ぼくは、この世界は、自分自身の原型から映し出された世界で、その顕現は混沌の無から「実」と「虚」として2極化したもので、「実」はこの世界の実体ある事象であり、「虚」は「実」の反転相、負の存在、この世界からは見えない存在として現出したものだと考えています。だから、当然エネルギーも実と虚の間で交換できるもので、この実と虚のバランスが取れた状態が、無の状態で、これは源の無い、完全な無の状態だと思います。この3次元は有の状態として見える世界ですが、それらの本質は無で、それは目に見えない虚を統合して初めて元に帰還できる、すなわち、本来の自己に戻れるものだと思います。この世界のものはいくら学問を修め、知識を得て、世に秀でた存在となっても、与えられている事象は、既に決定されていて、本質は何も変わらないのであって、現出した様相の中で、与えられた生を真に生きる意外に、なんの意味も無いものだと思います。ただ、真の実体すなわち、無の状態に到達できると、そこは無の世界なので、どんな物でも現出でき、その現出において、どんな変形も施せ、そして、自由に消滅させることもできるのだと思います。・・・ムクウさんの話からはこんな印象を受けました。どこか誤った認識はありますか？」



「誤りとか正解とかということは無いよ。それはお前の頭の中で展開された説明だからだ。もしかすると賢の言うとおりかも知れないが、そうでないかも知れない。実際に無に至らなくてはそれは分からないし、無に至ったら、分かるとか分からないという事自体が無くなる。その方向性もなくなる。だから、今考えていることが正しいか正しくないかの検証もできない。だが、賢、以前に比べて、認識力は高まってきているようだな。いいか、この「実」と「虚」の世界は賢の捉えた形だと仮定してもいいが、それでは、お前自身、すなわち無の状態のお前の本質とは何なのか分かるか？それと、「実」と「虚」とはどういう関係になっているのかも明確にしてみなさい。神とは何か？霊とは何か？意識とは何か？心とは何か？本能とは何か？一つ一つ、「実」と「虚」の世界に照らして考えてみなさい。そして、どうして、意識によって、この「実」の世界に物を現出させる物質化という現象を起こすことができるのか？考えてみれば分かることだろう。賢の考えている「実」と「虚」のモデルはなかなか要を得ているように見える。だがな、それだけでは、この現象界宇宙だけに限っても説明し尽くすことは難しい。自然界をよく観察してみなさい。お前が無限大と無限小について説明している言葉をワシも傍受させて貰った。だがな、無限小の極限が無限大になるという事を、実例で示すか、数式で示さない限り、この世界に生きている人間には理解できない。これから、意識改革を行ってゆくにつけても、少なくともこの3次元世界の全ての事象、現象を説明できなくては、公理といわれる仕組みの定義はできないと思っておく必要があるぞ。今日はその手始めとして、善と悪について、考えてみなさい。お前は善と悪をどう捉えているんだ？何か例を挙げて説明してみなさい」

「はい、善は悪の極、悪は善の極と見なすことができますから、どちらも同じだと思います。ただ、その限定された世界においては、その法則に準ずるものが善で、その対極にあるものが悪だと思います。こんな簡単な例を引用して失礼かも知れませんが、一つの例で説明します。A B Cの3人の人間が口論をしながら野原を歩いていてAとBが口角泡を飛ばしてムキになってきたとき、AがBを突き飛ばしたとします。そ

の時、その状況を見ていたCはAの行った行為について、いきなり善とか悪とか判断できませんでした。AはBの後ろに危険な蛇が鎌首をもたげて、今にもBに噛みつこうとしていたのを見て、口論の事など打ち忘れて、Bをその蛇から遠ざけたのです。蛇は驚いて直ぐに草むらに姿を隠しました。BもCも蛇の姿に気付きませんでした。Bはいきなり突き飛ばされたので、Aの行為を、口論の結果、興奮して手を出した悪い行為だと思いました。Aは事情を説明しました。しかし、Bは納得しません。CはAの行為の善・悪を判断しませんでした・・・僕はCでなくてはいけないと思っています。これは認識の違いによる判断の相違ですが、もう一つ、別の例を示してみます。A B Cの3人が共同で野菜の卸販売をしていました。Aは仕入れを担当し、Bは販売を担当し、Cが財務を担当していました。ある日、AはCにことわり無しに卸店から50袋の質の悪い大豆を、通常より安値で仕入れました。そして、それをBに渡しました。何時も大豆の仕入れは1、2袋で十分だったので、Bは激怒しました。その無断の仕入れのため、Bは質の悪い大豆ばかりを売らなければならなくなり、販売実績が落ち込み、その収益も減少しました。Cは冷静な人間でした。Aの行った行為に何らかの理由があるだろうと思い訪ねました。Aはある農夫が今年の日照りの影響で、大豆の質が悪く、全部売れ残ってしまって、家族を養うことも出来なくなったと言って泣いているのを見て、哀れに思い、それを全部買い取ってやったのだと言いました。しかし、その結果、A B Cの3人は赤字を抱え込むことになり、Bは大家族だったので、自分の家族さえ養えなくなりました。BはAの行為は3人の連携を無視した悪い行為であり、3人が約束して行っている商売なのに、安っぽい同情心を起こして、仲間の事を無視した、信頼を裏切る行為だと言ってAを攻めました・・・この例では、CはAの行為を善・悪という基準で客観的かつ単純には判断できないと思います。Aは自分の行為を「人を助ける善なる行為」と考えていますが、Bから見たらAの行為は悪です。そこには価値観のずれがあって、しかも確固たる基準がありません。判断の基準は人間が勝手に作ったものですから、どんな行為も善悪や是非で判断できないと思いま

す・・・例が上手くないですね。それにこんな幼稚な例で説明して、ムクウさんに申し訳なく思います」

「いや、賢、面白い例だったよ。この社会のことを分かっているようだな。善悪という判断は人間が創った社会的、道徳的、その他いろいろな種類の基準に基づいて行われている。そういう後天的な要素には揺り動かされないことだ。しかし、お前が特定の社会で生きるとき、その善悪の判断は必要になる。それも事実だ。お前の言った二つ目の例で見ると、Aの考え方もBの考え方も正しい。ただ、その立脚点と判断基準が違うだけだ。今日はこのくらいにしておこう」

「ムクウさん、一つ質問があります」

「何だ、何でも言ってみなさい？」

「今日の善悪の話は、この世界の仕組みの中のことで、この世界を超えたとき、善悪という考え方は無くなるのではないのでしょうか？この世界が仕組みで動かされている社会だから生じている判断で、次元を超えたとき、あるいは、無の状態になったとき、あらゆる2極的な内容は消えてしまうのではないのでしょうか。もしそうだとすると、この世界の仕組みは意味のないものなのではないのでしょうか？」

「そうだよ。だが、この3次元についての認識を、確実にできないと、上の次元には進めない。無理に進むと混乱に陥ってしまう。それをお前に再確認させたかったのだ。お前が次元を超えて行動しているとき、そのことを意識の底に定着しておくことが大切になる。それをするために我々はこの3次元で様々な経験を繰り返している。次元を超えると、そこには善も、悪も無いからな。意識的に生きていない者達は、自分がどう振る舞うのがいいのかも分からなくなる。完全に善・悪の彼岸の世界だからな」

「分かりました。ありがとうございました」

エチオピア

賢がムクウの修練を終えて、瞑想を解こうとしたとき、頭の中に、祐子

の声が聞こえてきた。久しぶりの祐子の声だった。

「あなた、お願いがあります。亜紀と連絡が取れなくなってしまったんです。亜紀は今、エチオピアに行っています。私は、今回はどういう訳か胸騒ぎがしたので、亜紀の病気の感染が心配だから、行かない方がいいと言って止めたのですが、どうしても聞きませんでした。これが自分の使命だと言って出掛けて行ってしまったのです」

「祐子、亜希子にはこの間会ったばかりだよ」

「ええ？あなたは海外出張から日本に戻っているんでしょう？」

「うん、テレポーションしたんだ。アジスアベバのホテルで逢った。亜希子は元気そうだったよ。マラリアとかチフス、コレラなんかの予防接種をしたりしてかなり用心していたよ。あれから奥地に行くと言っていた。NGOの人と相談して、行き先を決めるって言うていた。だけど、一番支援を必要としている地域には、危険な病気が蔓延している可能性があるだろう。だから、僕も心配しているんだ」

「そうなのよ。どこに行ったか分からないかしら？」

「僕が、亜希子の意識をサーチしてみるよ。少ししたら、また君を呼ぶから、意識を切らないでいてくれよな」

「わかったわ」

賢は瞑想状態のまま亜希子の行き先をトレースしてみた。亜希子の意識は発見できなかった。10分ほど時間を置いてもう一度、亜希子に語り掛けてみた。しかし、どうしても見つけることはできなかった。賢は祐子に連絡した。祐子は、康介と香川に支援を頼むから、亜紀にコンタクトできたら連絡して欲しいと言った。賢は了解した。それから、賢は亜希子からの連絡のチャンネルを開いた状態のまま眠りに着いたが、30分置きに目覚めて、亜希子の意識を探索した。外が明るくなってきたのを意識していると、頭の中に亜希子の声が聞こえたような気がした。誰かと会話しているように感じられる。相手は賢でないことだけは明らかだ。どうやらその会話の中で、時々意識が賢の方を向くことがあるようだった。賢は亜希子に呼び掛け続けてみた。15分ほどして、亜希子が応答した。

「あなた、わたくしをお呼びになったかしら？あなたの声が聞こえた様な気がしました。あなた、わたくしです。亜紀です」

「亜紀、どこに居るんだ。みんな心配しているぞ。おまえの行き先が分からなくなったって、祐子からも連絡があったんだ」

「あなた、ごめんなさい。わたくしたち、今まで、携帯電話も通じなく、普通の電話も無い場所に居たのです。ですから、丸2日ほどお姉さまに連絡していないのです。わたくしはキガリでアジスアベバに住んでいるNGOの曾我野さんという方と連絡を取って、難民救済のお仕事に参加させていただくことに致しました。お姉さまもそのことはご存知です。アジスアベバでは、あなたともお話したでしょう。だから安心していたのです。でも、ここまで来るのに乗ったバスが酷かったんです。主要幹線道路を通っているときはそれほど振動も無かったのですが、一旦、外れて舗装の無い道に入ると、すごいでこぼこ道で、それだけでもとても苦痛でしたが、この暑さなのに、バスに冷房は効いていないでしょう。その上、窓も開けてくれないんです。わたくしが開けようとしたら、後ろのおじいさんに怒られてしまいました。結局わたくしは4時間近く、蒸し風呂の中に居たのです。途中で人が乗り降りするときに、入り口の扉が開いて、入ってくる風で息を吹き返すような感じでした。そのときを待って、じっと耐えていました。ですから宿に着くと、もう、ぐったりしてしまいました。ベッドに横になりたかったのですが、ベッドに変な小さな虫が沢山いて、横になる気になれなくて。食堂に行っても、食事もう喉を通らなかつたのです。曾我野さんは、慣れているようでした。それでも、曾我野さんと明日からの活動の予定を相談しなくてはならないので、我慢して、さっきまで受付にあるソファで話を伺っていました。ホテルがサービスで出してくださったお水も、黴臭くて、いただけませんでした。ですから持ってきたミネラルウォーターをいただくしかありません。部屋には、ベッドとシャワーは付いているんですが、シャワーを浴びたら、体がくさくさになってしまうでしょう。これから寝る時間なのですが、床に寝たら、もっといろいろな虫に刺されそうですし、どうしようかと思っています。何かいい方法はないかしらと思っていたら、

あなたからの声が聞こえて、ほっとしました。あなた、わたくしは一体  
どうしたらいいでしょう？」